

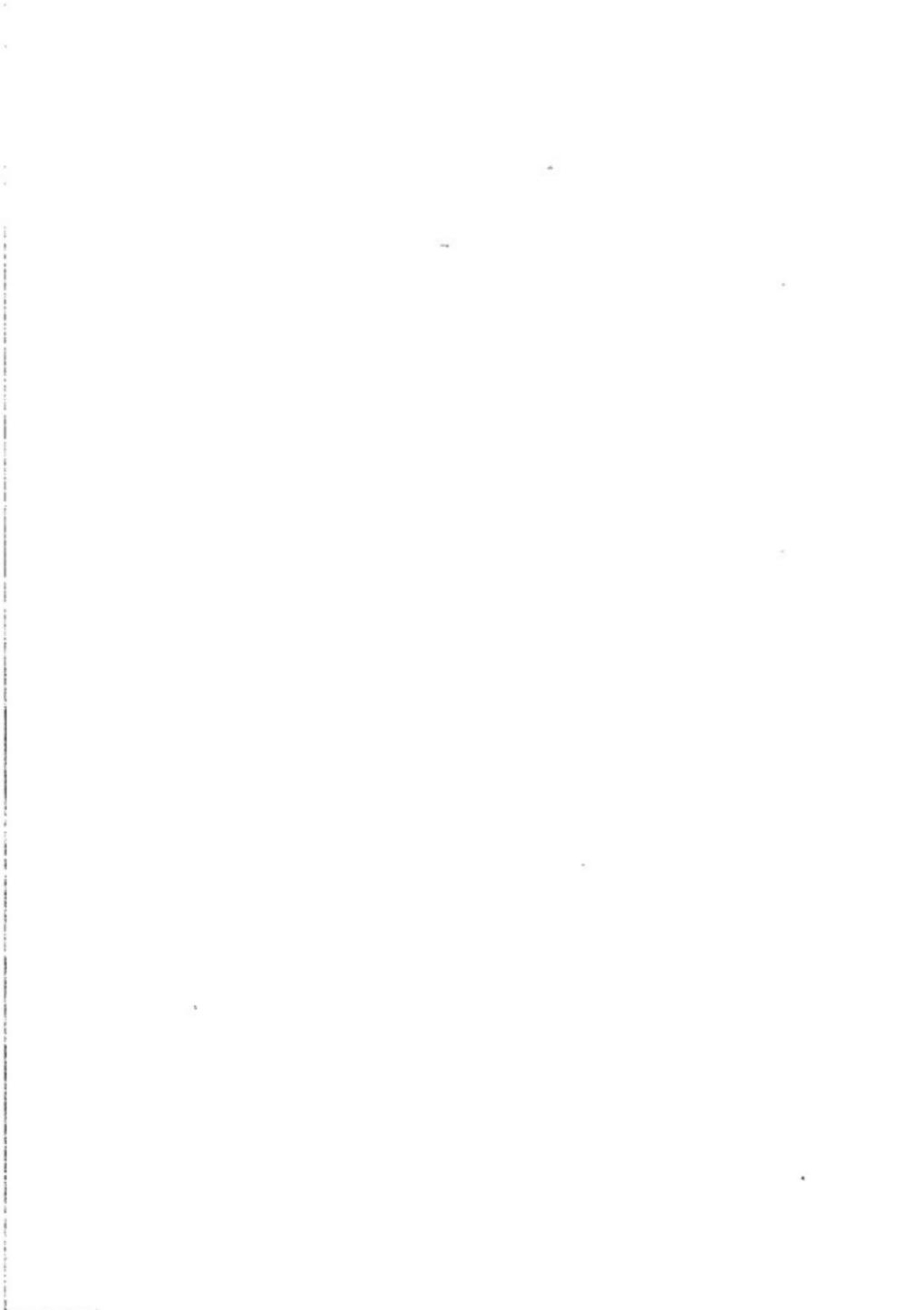
昭和55年度

—東八代横断広域農道建設に伴う—

一 城 林 遺 跡

弥生時代末期集落の発掘調査報告書

山梨県教育委員会



序 文

東八代横断広域農道は甲府盆地の東側を御坂山麓に沿って建設されている。御坂山麓南半は曾根丘陵地帯であり、北半は扇状地帯である。この一帯は肥沃な土地で、豊かな農業経営がなされている。広域農道はこの地帯に散在する農村の連絡道路となる。またここには多くの古代遺跡が在り、これの建設に伴う発掘調査も行こなわれて来たが、一城林遺跡の発掘をもって終了した。

一城林遺跡は弥生時代後期の集落跡である。昨年は中道町地内で「風土記の丘」を、敷島町地内で中央自動車道を、また塩山市地内で警察署を建設するために弥生時代後半から古墳時代初期の遺跡を発掘した。これらの調査が本県文化と考古学の発展に寄与出来れば幸である。

最後に夏の炎暑の中で発掘調査にたずさわってくださった学生諸君をはじめ、地元の方々や、ご協力下さった地元三珠町教育委員会に記して敬意を表する。

昭和55年7月31日

山梨県教育委員会教育長 神宮寺 誠

例　　言

- 1.執筆者氏名は報告文の末尾に記した。
- 2.編集は県文化財主事森和敏及び小林たつ子（甲府市）が主として行った。
- 3.実測は国学院大学生信藤裕仁、鈴木恭一、安部伸一並びに薬袋正（中道町）が行った。
- 4.トレスは主に小林たつ子が行った。
- 5.写真は森和敏が撮影した。
- 6.発掘終了後の室内作業は、前記の者の外山梨大学学生、八代町内在住者など多くの方の協力を得た。
- 7.発掘参加者は次のとおりである。
- 8.この報告書は昭和53年度に行った東八代横断広域農道建設に伴う発掘報告書である。

調査参加者

折井忠義、渡辺礼一、清水澄、渡辺孝子、国学院大学学生一信藤裕仁、山梨大学学生一横小路義、今村ミチル、池谷正志、帝京大学学生一土橋忠、丹沢忠雄、農林高校郷土研究部一長田松雄、野田秀雄、小林誠、中村美津治、伊藤保雄、内藤孝、三珠町一塙島忠雄

目 次

序

第 1 章	調査の経過	9
第 2 章	位置と環境	11
第 1 節	位置と自然環境	12
第 2 節	—城林遺跡の遺物分布調査と遺構	12
第 3 節	調査地区の地質構成	14
第 3 章	遺構と遺物	18
第 1 節	住居址と遺物	19
第 2 節	その他の遺構と遺物	36
第 4 章	結 び	48

挿 図 目 次

第 1 図	甲斐国西八代郡上野村…城林遺跡之図……………	9
	「焼米を出土した甲斐上野一城林遺跡に就いて（略報）」・山本 寿々雄『郷土における文化遺産』続々篇より	
第 2 図	一城林遺跡位置図……………	11
第 3 図	一城林遺跡遺構・遺物分布図……………	13
第 4 図	C - 15地層柱状図……………	14
第 5 図	D 5 ~ D21セクション図……………	15
第 6 図	基本層序図……………	15
第 7 図	B11・12セクション図……………	15
第 8 図	基本層序図……………	15
第 9 図	基本層序図（写真）……………	16
第 10 図	南斜面No.1 トレンチセクション図……………	17
第 11 図	一城林遺跡全体図……………	18
第 12 図	Y 1 住居址平面図（上層）……………	19
第 13 図	Y 1 住居址平面図……………	20
第 14 図	Y 1 住居址平面図……………	21
第 15 図	Y 1 住居址炉址微細図及び炉址セクション図……………	22
第 16 図	Y 1 住居址出土遺物……………	23
第 17 図	Y 1 住居址出土土器・石器……………	24
第 18 図	Y 2 住居址平面図……………	26
第 19 図	Y 2 住居址出土土器・炉石……………	27
第 20 図	Y 3 住居址平面図……………	27
第 21 図	Y 3 住居址出土遺物……………	28
第 22 図	Y 4 住居址・Y 5 住居址平面図及びセクション図……………	29
第 23 図	Y 4 住居址付近出土遺物……………	30
第 24 図	Y 5 住居址出土遺物……………	32
第 25 図	Y 6 住居址土器出土状況（上層）……………	34
第 26 図	Y 6 住居址土器出土状況（中層）……………	35
第 27 図	Y 6 住居址土器出土状況（下層）……………	35
第 28 図	集石址と Y 6 住居址平面図……………	35
第 29 図	Y 6 住居址出土遺物……………	35
第 30 図	Y 6 住居址出土遺物……………	35

第 31 図	No.1 溝（S D—1）平面図.....	36
第 32 図	No.2 溝（S D—2）平面図.....	36
第 33 図	集石址平面図	36
第 34 図	集石址出土土器・石器.....	37
第 35 図	C 9・10グリッド確認床面図.....	37
第 36 図	D 10・11グリッド確認床面図.....	39
第 37 図	第一層出土遺物.....	44
第 38 図	各グリッド出土遺物.....	45
第 39 図	各グリッド出土遺物.....	46
第 40 図	南斜面No.1 トレンチ出土遺物.....	47
第 41 図	南斜面No.2 トレンチ出土遺物.....	47
第 42 図	南斜面No.3 トレンチ出土遺物.....	47

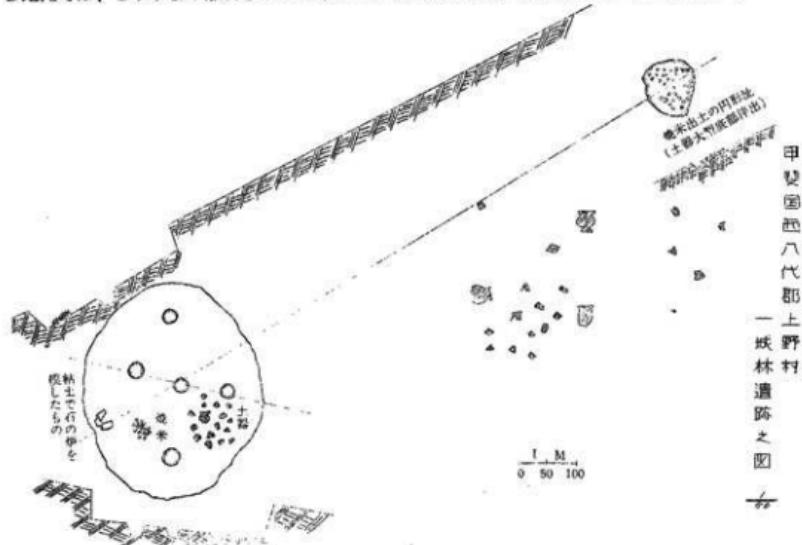
図 版 目 次

図 版 1	遺 跡 近 影.....	49
図 版 2	Y 1 住居址遺物出土状況と取上後の住居址	50
図 版 3	Y 1 住居址炉址・第2号溝 (S D - 2)	51
図 版 4	Y 1 住居址土器出土状況	52
図 版 5	Y 2 住居址・炉址用の石出土状況	53
図 版 6	第1号溝 (S D - 1) ・ Y 4 住居址・Y 5 住居址及び S D - 1 増出土状況・Y 4 住居址サブトレント土器出土状況	54
図 版 7	Y 6 住居址遺物出土状況・集石址	55
図 版 8	Y 3 住居址埋甕出土状況・発掘参加者	56
図 版 9	出 土 遺 物	57
図 版 10	出 土 遺 物	58
図 版 11	出 土 遺 物	59

第1章 調査の経過

東八代横断広域農道建設に伴う発掘調査は昭和38年から開始して、遺構を検出した箇所は5ヶ所であった。今回発掘調査を行った一城林遺跡が最終回である。

・城林遺跡は以前から、地元では土器が出土することで知られており、その出土品の多くは三珠町立大塚小学校にある三珠町考古館や地元住民が所蔵している。昭和26年に日本考古学協会が発行した日本考古学年報第4号で山本寿々雄氏は次のように試掘調査の結果を報告している。「所在地 山梨県（甲斐国）西八代郡上野村、調査期日 3月20～6月5日、調査者 山本寿々雄・仁科義男・甲府一高考古班、調査概要 本遺跡地は曾根丘陵の末端に位し、芦川によって下九一色村・市川大門町に接する。附近一帯から弥生式土器の中期および後期の遺物を出土する本地方有数の弥生式遺跡群地帯である。今回からは計画的調査を開始し、手始めに一城林を選定し地元教育委員会、役場等の後援でA・B両地区を発掘調査した。〔A地区〕焼米、およびそれを貯えた弥生式後期壺形土器と、焼米塊、小ピット〔B地区〕小規模の竪穴式住居址1個等の発見があった。A地区では、表土より50cmのローム層下に、短径1.20m長径1.35mのピット内に、壺形土器に充満した焼米および焼米塊が発見されたが、その他は検出されず。B地区では、ピットより離れること北方5mから長径3.70m、短径3.30mのやや楕円形プラン



第1回 「焼米を出土した甲斐上野一城林遺跡について（略報）」
山本春々雄「郷土における文化遺産」続々篇より

の住居址 1 個と完形後期の弥生式土器 9 個を検出した。なお住居址中とくに注目すべきは、炉の位置と質である。炉は北西寄りの片隅に石を模したのが、粘土で造られていた。出土土器が後期終末の弥生式土器で、下沼江村和泉の堅穴の炉と併行して考察できる問題でもあり、文化移行過渡期の所産として今後精査の必要がある。また焼米は甲府盆地底部増坪遺跡とあわせて原始農耕研究上、貴重な自然遺物資料である。報告は「郷土に於ける文化遺産」「甲斐考古学資料集」（古代学研究）その他」とある。

ここでは A 地区及び B 地区はこの遺跡のどこに位置するのか確定しないが、折井調査員によると、今回の発掘地点より下（西）方約 50m の付近とのことである。

発掘期間は昭和 53 年 7 月 9 日から 8 月 19 日までであった。先ず予備調査として 7 月 2 日に一城林遺跡の遺物の表面採集を行い、遺跡の全体像をつかみ、これによって発掘調査計画を立案したのである。

まず用具を現地に運搬しテントを設営した。発掘予定地の桑や雑木を刈り取り、バックホーで桑株を抜根し、耕作土（表土）を除去し整地した。発掘は西南にある谷の斜面に巾 2m、長さ 5m のトレンチを三本入れることから始めた。遺構はなく、その地山直上や覆土から土器片や一部分欠損した土器 1 ケが出土したところから、弥生時代人が不要になったものを投棄したものと推測出来る。表面から地上までの深さはどのトレンチでも約 60cm であった。

グリッド A 9・10 や B 9・10 の付近は耕作土（表土）が浅かったので、遺構の検出が当初から出来たが、耕作による破壊が進んでいたためほとんど部分的にしか残存していないかった。住居の床面と思われる大小の床面が点在していたが駆は見当らず、住居址としてまとめることが困難であったが、7 月下旬結論として一応推測してみたものが Y 6 住居址である。またこの付近には床面の中心部分が非常に硬く、西に離れるに従って次第に軟弱になり 1.5m くらいのところで消滅するような住居址とは思われないものもあった。道が小さい広場のようなものであろうか。付近は床面に密着した焼土と炭が多い。

引続いて、C 6 グリッド付近に遺物が多く出土し始め、焼土や炭化物塊も伴って検出来た。8 月 5 日に、床面にはほぼ一面にある焼土と、建築材が焼けたと思われる棒状の炭化物 3 本やセットで床面に散乱している土器があった。炭化物の一部を年代測定資料として保存し、実測と写真撮影をし、発掘地区の中央にある溝 S D-1 と溝 S D-2 を発掘し、S D-1 から完形の埴を発見した。

Y 2 住居址及び Y 3 住居址は農耕によって著しく破壊が進んでいたため、その床面の半分から 3 分の 1 くらいが残存しているだけで、焼土や埋甕の一部が検出された。

8 月 17 日に、S D-2（溝-2）と S D-3（溝-3）との間に Y 4 住居址と Y 5 住居址が検出された。いずれも農耕によって破壊され、床面の一部と焼土が検出され、少量の土器片が出土したのみであった。

8 月 19 日に発掘が終了したのであるが、発掘予定地の一部を事前にアルドーザーでカットされたため、調査出来なかった箇所がある。発掘終了後、11 月と 12 月に遺物の洗浄、復元等整理を、実測とトレス等を調査員・補助員・国学院大学生等で行い、統一して、編集を森・小林で行った。（森和敏）

第2章 位置と環境



第2図 一城林遺跡位置図

甲府盆地に弥生文化が本格的に伝播したのは後期初頭とみられている。その影響は静岡方面からのものが最も強く、長野方面からの影響がこれに次ぐであろう。静岡方面から富士川沿岸か富士山麓西側を経て、豊富村・中遠町・三珠町付近に流入したものであろう。その後弥生文化はこの付近を中心発展し、中心地的位置を保ちながら古墳時代初期へと受け継がれていく。

一城林遺跡はこのような歴史の中にあって、弥生時代後期末に比定出来る住居址跡と遺物などを検出した。¹⁴C年代測定によると西暦330年±120年と測定された。（森和敏）

第1節 位置と自然環境

一城林遺跡は山梨県西八代郡三珠町大塚小字一城林にあり、発掘した場所は3433番地～3435番地である。

相対的な位置としては、甲府盆地の東南にあり、御坂山麓の西に連なる曾根丘陵群の南辺で、曾根丘陵の一枝脈であって、北に傾斜する舌状台地で、フラットな地形が階段状に二段になっている。上段は巾70m、長さ160mくらいあり、ゆるやかな傾斜をなしている。下段は巾120m、長さ50mくらいで、上段との境及び東側はやや急な坂である。遺跡は上段に占地しており、発掘場所はその上部である。台地の西と東は比高70mくらいの深い沢になっていて、當時御坂山脈から清流が流れ出ている。この二つの沢の中腹には河岸段丘状に広がるフラットな場所があるが、磨耗した土器の散布が若干みられる。この沢は比較的急傾斜で、大小の転石で河床を形成している。稲作耕作が出来るような湿润地は300mくらい離れた距離で丘陵が甲府盆地底部に接する所まで下りなければならない。また台地の北600mの距離に笛吹川が南流している。この付近としては、この一城林遺跡がある舌状台地は、もっとも良い自然条件を具备している。ある程度の広いフラットな場所があり、水は両側の沢にあり、日当りが良く、眺望もよい。稲作を行う水田もたいして遠くはない場所である。（森和敏）

第2節 一城林遺跡の遺物分布調査と遺構

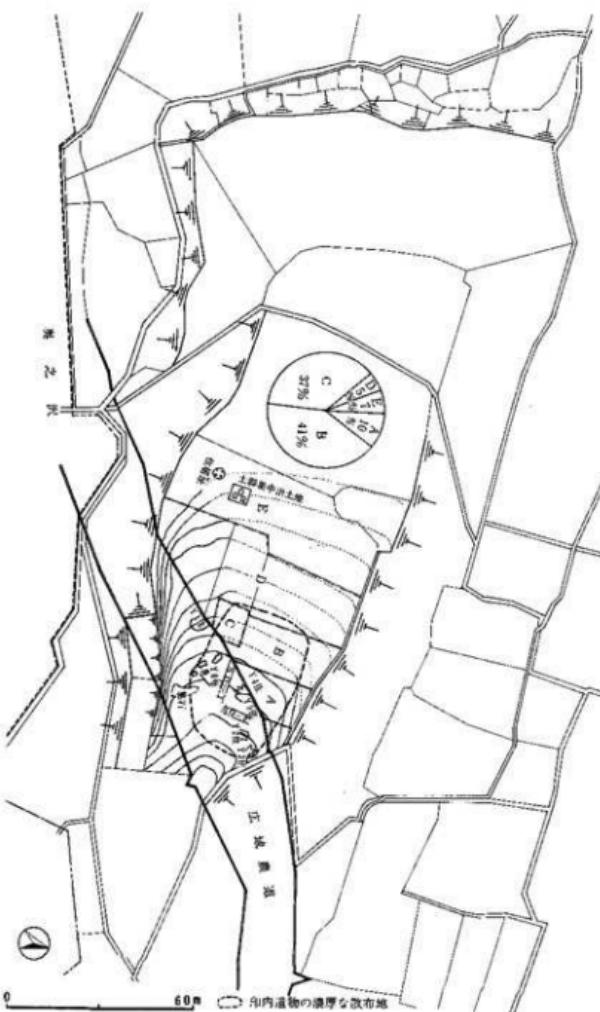
遺物の表面採集による分布調査は、発掘調査の前に行った。遺物はほとんど弥生時代末葉の土器破片で、少量の須恵器破片と陶器破片を採集することが出来た。分布状況は、台地の上端、すなわち今回の発掘地点とその付近に集中していて、その標高は298m前後である。

台地は南西に傾斜する長さ約230mの舌状を呈し、両側は、上部では急傾斜で、比高15mくらいであるが、下部では緩傾斜となり、畑の区画線で二段となっている。第3図は分間図に、今回測量した等高線と遺構を転記（点線と急傾斜は目測）したものである。分間図の誤差が著しいので、正確に転記出来なかった。

表面採集は畑一筆毎に行い、円グラフにその遺物量を示した。面積割に計算しなかったが、その78%は、A・B・Cの畑つまり、舌状台地の上端にあり、発掘された遺構のある付近とその下方に集中している。下方のDに5%、Eに7%あった。Eの畑では「経過」で前述した住居址と、多量に土器が発見された所があるので、遺構の包含地であることが考えられる。更に下方で、農道の付近にも若干ではあるが、遺物が分布しているが最下端ではほとんど見られ

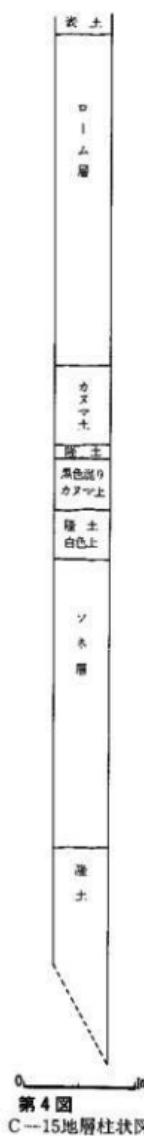
ない。

A・B・Cの畑及び発掘した地域でも、東南と北西にある急斜面（両側）に近い場所には分布が少ない。これらを総合してみると、遺物が集中している場所の上端はY6住居址・Y3住居址となり、東南端はY1住居址、北西端は未掘の場所となる。この遺物集中地域の広さは、東西約35m、南北約45mとなる。発掘ではY6住居址より下で、SD-1の南は、破壊された断片的な住居址の床面と思われる場所が数ヶ所あり、遺物の出土量も多い地区であった。Y1住居址は、これらの集中的に出土した住居址群や、遺物出土地からや離れていたと言



第3図 --城林遺跡遺構・遺物分布図。

ってよい。山本邦々雄氏が発掘した住居址や、塩島篤氏が発見した土器一括出土地は、この地域からほんほん30m離れている。ただSD-1とSD-2は方形周溝墓の溝である可能性もあることを考えると、居住地が若干移動したこととも考えられる。



以上のように遺物分布調査と発掘した遺構の分布とを比較してみると、集落が台地の上端のフラットな場所にあったことは確かであり、またその下方にも遺構があることもまた確かであろうと思われる。地表面に遺物が散布する状態は、埋没している住居址の多少と必ずしも一致するものでもない。深く埋没している場所では地表に遺物が出てこないこともあるからである。

(森和敏・清水澄)

第3節 調査地区の地質構成 (第4・5・6・7・8・9・10図)

本遺跡は、曾根丘陵の1支丘に立地している。層の堆積は、西側斜面の部分で第3層が欠陥しているが、他はほぼ一様の堆積状態である。

標準層序

- 第1層 表土、暗褐色を呈するいわゆる耕作土である。層厚は、20cmから40cm位で西半は一様に薄い。
- 第2層 炭及びロームブロックを若干含む茶褐色土層。層厚は、30cmから40cm位で、部分的に焼土粒子が多い所がある。西から東に向かって漸移的に明るみを増す。遺物は、大部分この層より出土している。
- 第3層 まじりけのない黄褐色土層。東端以外は、バサバサしていて粘性がない。遺構や擾乱で切られている以外ほぼ一様に看取できる。西側に少ないので傾斜が東に比べてきついためであろうか。遺物はまったく含まれておらず、第2層第IV層との区別は容易である。
- 第4層 黄褐色粘質土層。いわゆる曾根ローム層で、3mほどの厚みをもつ。

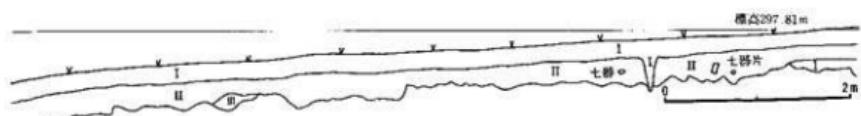
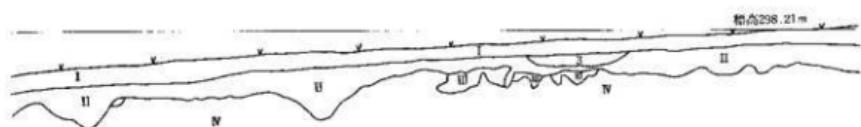
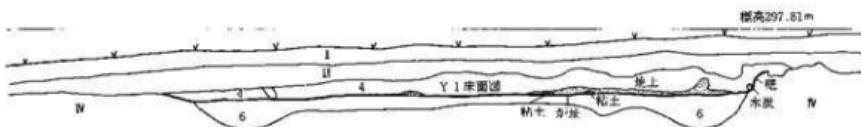
2次堆積土

第1層と第3層の間に存在する層で、人為的あるいは部分的に自然にできた層である。

- 1層 暗茶褐色土層。第2層に比べ色調はやや暗く、ロームブロック、炭の含有は少く、やや締りがある。SD-1・2などで覆土としてみられる。
- 2層 明茶褐色粘質土層。第2層より、非常にしまりがよく明るい。含有物はII層と同じでSD-2にのみ見られる。
- 3層 黒褐色土層。焼土を若干含み、第II層よりも締りが悪い。
- 4層 灰黒色土層。住居址の床面上にある層で、焼土、炭の含有が極めて多い。粘性はなくY1住、Y2住にみられた。



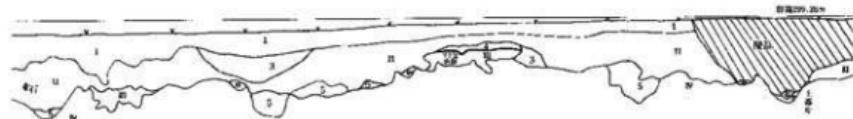
第5図 D 5～D 21セクション図



第6図 基本層序図



第7図 B 10・11セクション図



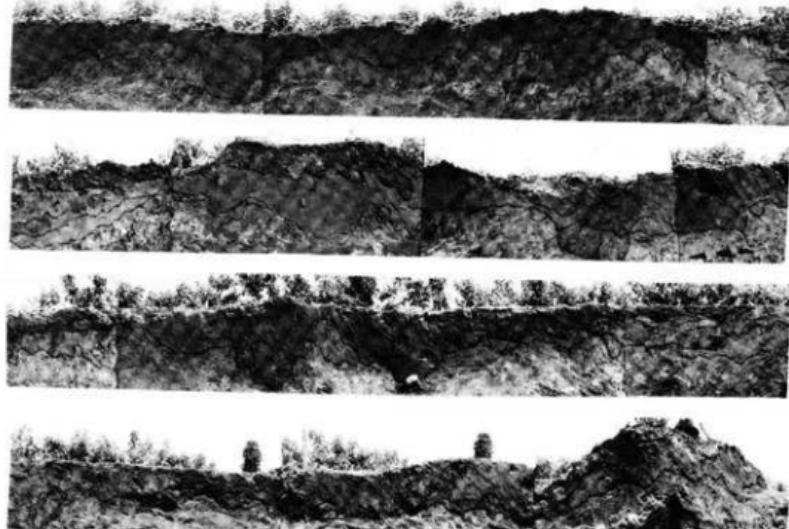
第8図 基本層序図

標準層序説明

- 第1層 表土。暗褐色を呈する。いわゆる新作土である。層厚は20cm~40cm位で、西半は一様に高い。
- 第II層 炭及びロームブロックを若干含む茶褐色土層。30cm~40cmの厚さをもち、部分的に燒土粒子が多い所がある。セクションより、西から東に漸移的に明るみを増す。遺物は大部分この層より出土している。溝の部分では全然みられない。
- 第III層 まじりけのない黃褐色土層。バサバサとしていて粘性がないが東端はしまりがよい。遺構や擾乱で切られている他は、東側ではほぼ一様に看取できる。西側に少ないのでは頗然が東に比べてきついからであろうか。遺物はまったく含まれておらず第II層、第IV層との区別は容易である。
- 第V層 黄褐色粘質土層。いわゆる曾根ローム層で3~5cmの厚みをもつ

2次堆積土層

1. 喀褐色土。II層に比べ色はやや暗くロームブロック・炭の含有は少くややしまりがある。SD-1、2などで覆土としてみられる。
2. 明茶褐色粘質土。II層より非常にしまりがよく明るい。含有物はII層と同じ。SD-2にのみ見られる。
3. 黒褐色土。洗土を若干含むII層よりしまりが悪い。
4. 灰黑褐色土。住居址の床面上にくる層で焼土・炭の含有がきわめて多い。セクションではY1住、Y2号住にみられる。
5. 黄褐色粘土質土層。ロームブロック・焼土粒子を若干含む遺構と思われる。落ち込みの最下部にみられロームブロックは他に比べて顯著である。
6. 暗黄褐色土。Y1住の床面下掘り方に入る層で、しまりはややよい。



第9図 基本層序図

5層 黄褐色粘質土層。ロームブロック、焼土粒子を含む。特にロームブロックの入り具合は顕著である。遺構かと思われる落ち込みの最下部にみられる。

6層 暗黄褐色土層。Y1住居址の床面下掘り方にあたる層でしまりはよい。

ローム層以下の地層

本遺跡では、発掘調査前に東八代横断広域農道の工事が進行して丘陵東半が道路幅で、地表下約9mも掘り下げられていた。このためローム層以下の層が露呈していたので、観察することができ、以下にこれを記す。

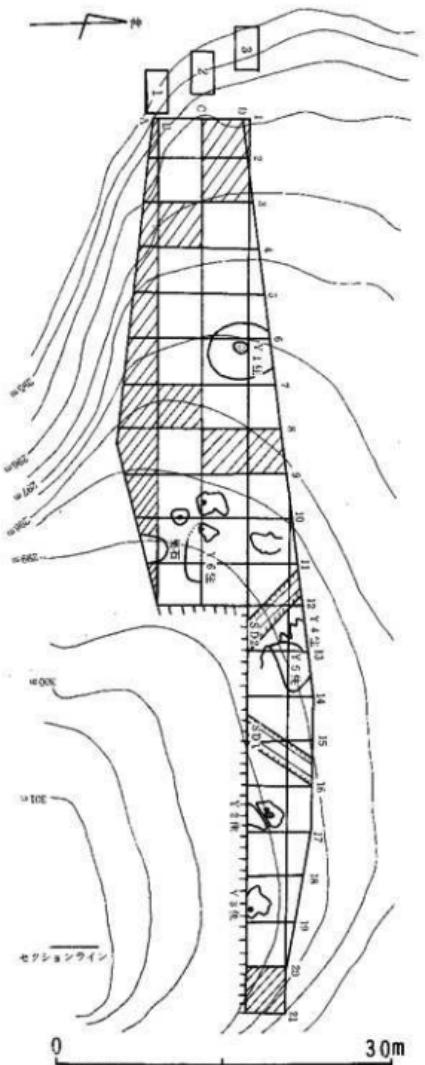
曾根ローム層の下には、信州御獄火山第一浮石層といわれる豊富バミス層がくる。この層は通称鹿沼土と呼ばれ、風化すると粘土質の灰白色土となる。ここでは、約1.7mの堆積のうち黄褐色浮石層、粘土化灰白色浮石層（陶土）、黒黄褐色浮石層、粘土化灰白色浮石層（陶上）と交互に2度づつ出ている。A・B4.5.6区では第II層の下はロームがなく、直接黄褐色浮石層がでている。その下には、約2.5mほど曾根層群中の砂礫層が続いており、さらに灰白色粘土質土層がきていた。曾根層群の下には、基盤岩となる御坂層がきていると思われる。

曾根ローム層以下については、「山梨県地質誌」の中府盆地と南東部地区を参照した。

（信藤祐仁）



第10図
南斜面No.1 トレンチセクション図



第11図 一城林遺跡全体図

第3章 遺構と遺物

遺構は6基の弥生時代住居址・2本の溝・集石遺構及び踏み固められた場所等であった。Y1住居址を除いた他の遺構は台地の最もフラットな地域に占地している。このフラットな地域は北にやや傾斜していて、台地の中心より東側にある。今回発掘した遺構群は、集落の上部のものとみられたことは、表面採集を行って、地形図に遺物の散布範囲を落してみて判別出来た。なお住居址の多い地域には焼土の広がりが非常に多く、集落が火災にあったようにも見られる。また住居址には明確に柱穴が検出出来なかつたことも特徴的である。

遺物の出土は台地の中心付近とその西側に多かった。遺構群は東側に多かったのだが、西側は表土が20cm~30cmと薄く、遺物の包含層が少なかったことによる。西側の斜面に設定したトレーンチからも遺棄された遺物が出土した。

出土遺物は、発掘地図の表面採集や、各グリッド及び各住居址とその付近から出土した土器等については別表の通りである。このほか、各遺構から土器片が検出されているが、小破片のため、原形復元ができないもの、また形態、文様など推考できないものがあった。

この遺跡は、住居址等からの出土遺物からみて、弥生時代後期末葉から、古墳時代初現期のものと思われる。文様もほぼ一定しているようである。

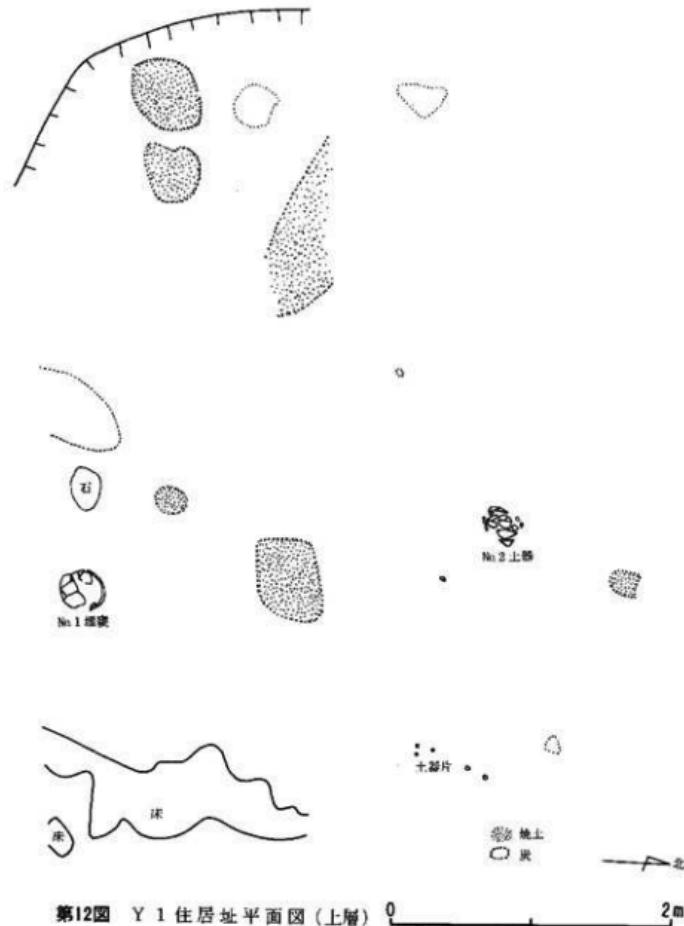
以下、出土遺物のうち、主な土器について遺構別に順を追って記述することとする。

第1節 住居址と遺物

Y 1 住居址 (第12・13・14・15図)

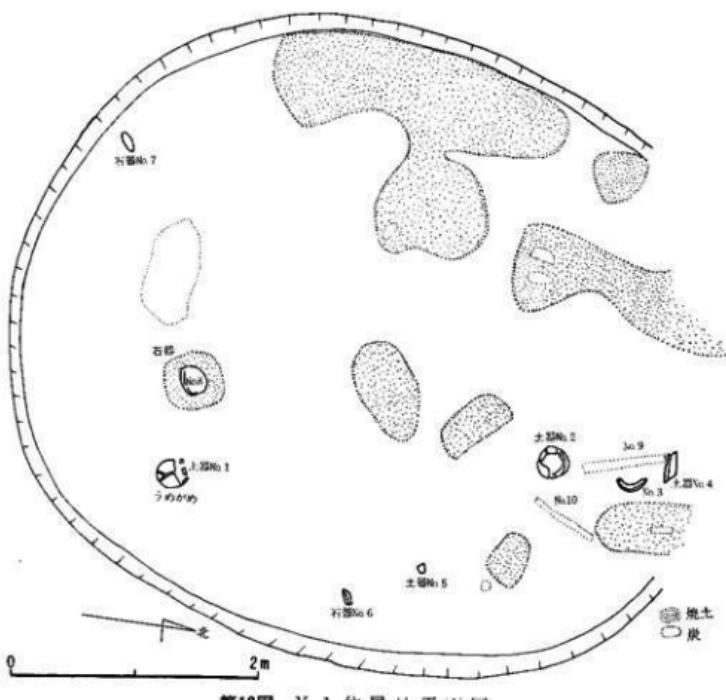
最も西にある住居址で、遺存状態もよく、一括して遺物が出土した。

覆土中から非常に多く焼土や炭化物が検出され、床面直上には建築材が燃え落ちたと思われる棒状の炭化物が2本と床面に広がる8ヶ所の焼土の中に木の炭化物及び炭化塊があった。火



第12図 Y 1 住居址 平面図 (上層) 0 2m

災にあった住居と思われる。遺物No.9の炭化物を、学習院大学年代測定室の木越邦彦教授にC年代測定を依頼し、その結果を別に掲載する。



學習院大學放射性炭素年代測定結果報告書

1978. 12月 6日

1978年9月19日受領致しました試料についての¹⁴C年代測定の結果を下記の通り御報告致します。

なお年代値の算出には ^{14}C の半減期として Libby の半減期5570年を使用しています。また付記した誤差は β 線計数値の標準偏差 σ にもとづいて算出した年数で、標準偏差 (one Sigma) に相当する年代です。試料の β 線計数率と自然計数率の差が 2σ 以下のときは、 3σ に相当する年代を下限とする年代値 (B. P.) のみを表示してあります。また試料の β 線計数値と

現在の標準炭素についての計数率との差が $\pm 2\delta$ 以下のときには、Modernと表示し、 $\pm C\%$ を付記してあります。

記

Code No.

試 料

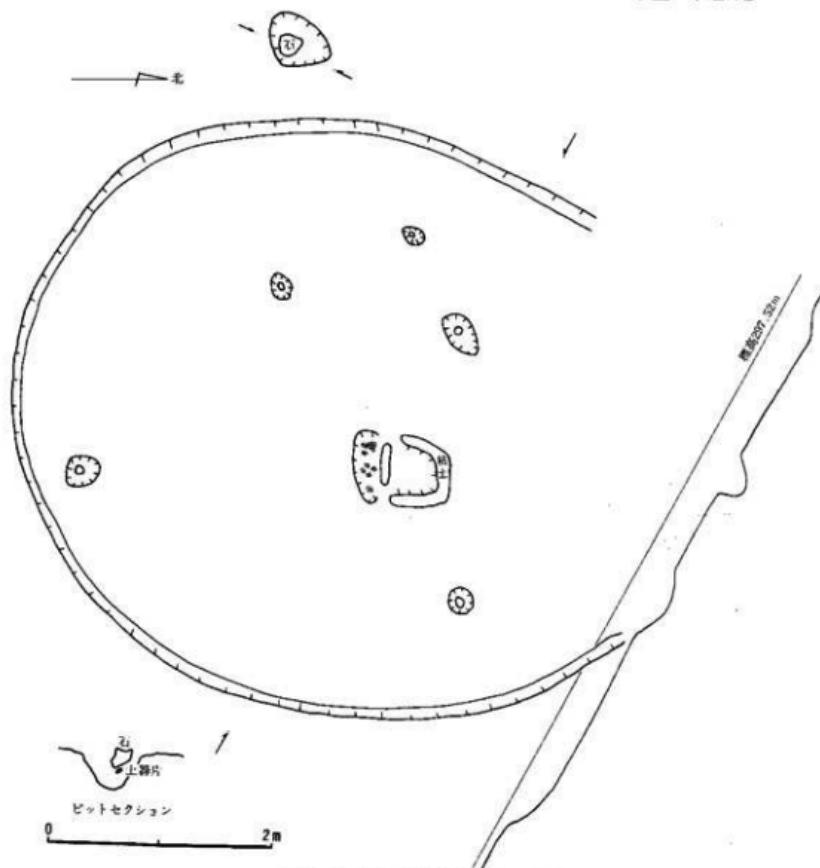
B. P. 年代 (1950年よりの年数)

GaK-7577.

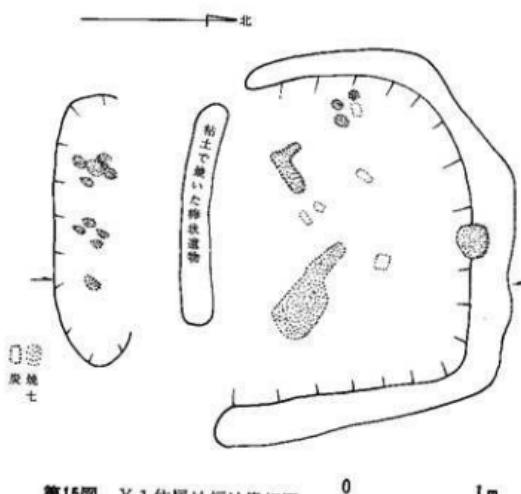
Charcoal from Ichijoohayashi. 1620 ± 120

A. D. 330

以上 木越邦彦



第14図 Y 1 住居址平面図

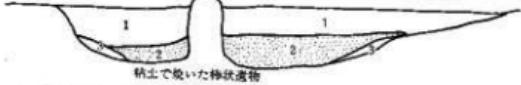


第15図 Y-1 住居址炉址微細図

これによると誤差を考慮に入れても4世紀前半に比定出来る住居址である。

プランは長円形を呈していて、道路敷以外の発掘出来なかった所まで推計すると、長軸は約6m、短軸は約5.2mである。住居址の壁の内側に巾約1mの周溝がある。周溝は住居址構築当初に掘り、後に何故かわからないが埋めている。(第6図 セクション図参照)。

床面下に掘り方があり床面は炉址付近で固く、周囲の壁に近づくに従って軟弱になっている。住居址(壁)の深さは20cm~25cmである。ピットは5ヶ所あり、その内柱穴と思われるものが、2ないしは3ヶ所である。



第15図 炉址セクション図

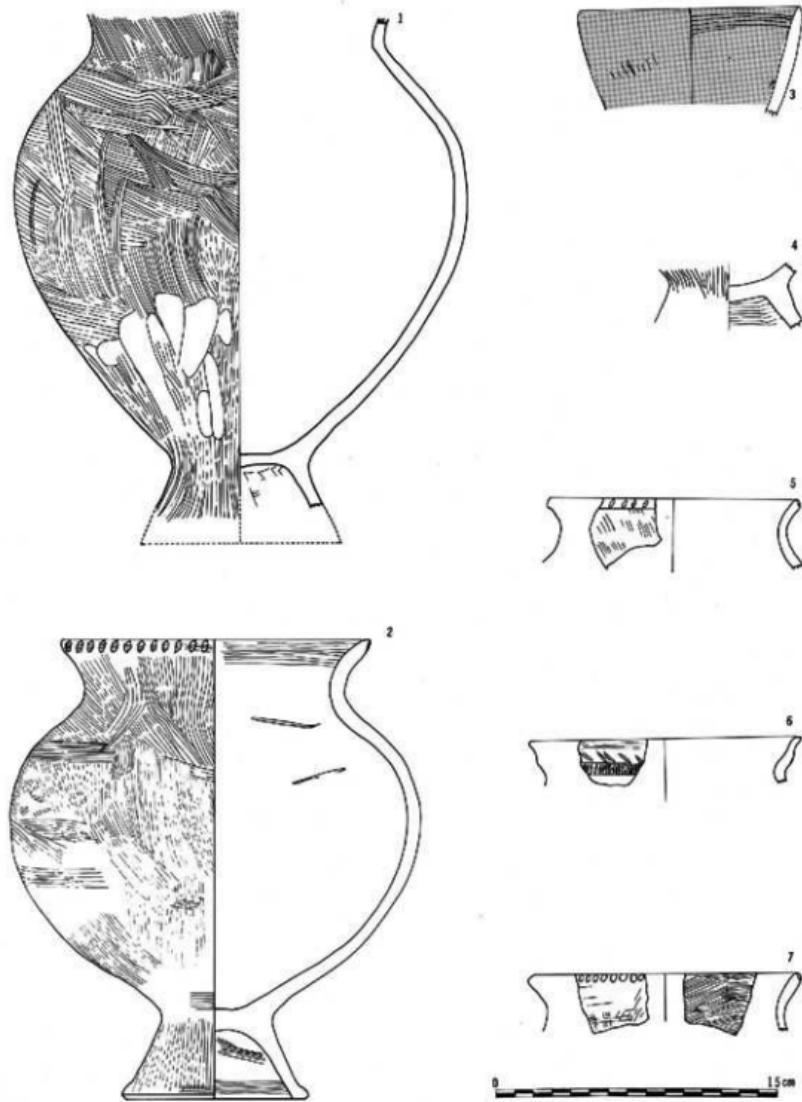
炉は中心よりやや東北に寄った位置にある。炉は2つの部分から構成されていて、一方は陶土(枯土化灰白色浮石層)でコ字状に炉を作り、他の一方は単に掘っただけである。陶土は西と東の谷に露出しているものを使用したと思われる。その二方の中心に粘土で焼いた棒状遺物で区切っている。この炉の構築方法は、山本寿々雄氏が発掘した前掲の炉と近似しており、またY-2住(第18図)の炉とも似ている。遺物の出土状態は、No.1の甕が倒れて半分床面下に埋まっていた他は床面上に散乱した状況であった。また不定形の石器が2ヶ出た。

Y-1号住居址出土遺物(第16・17図)

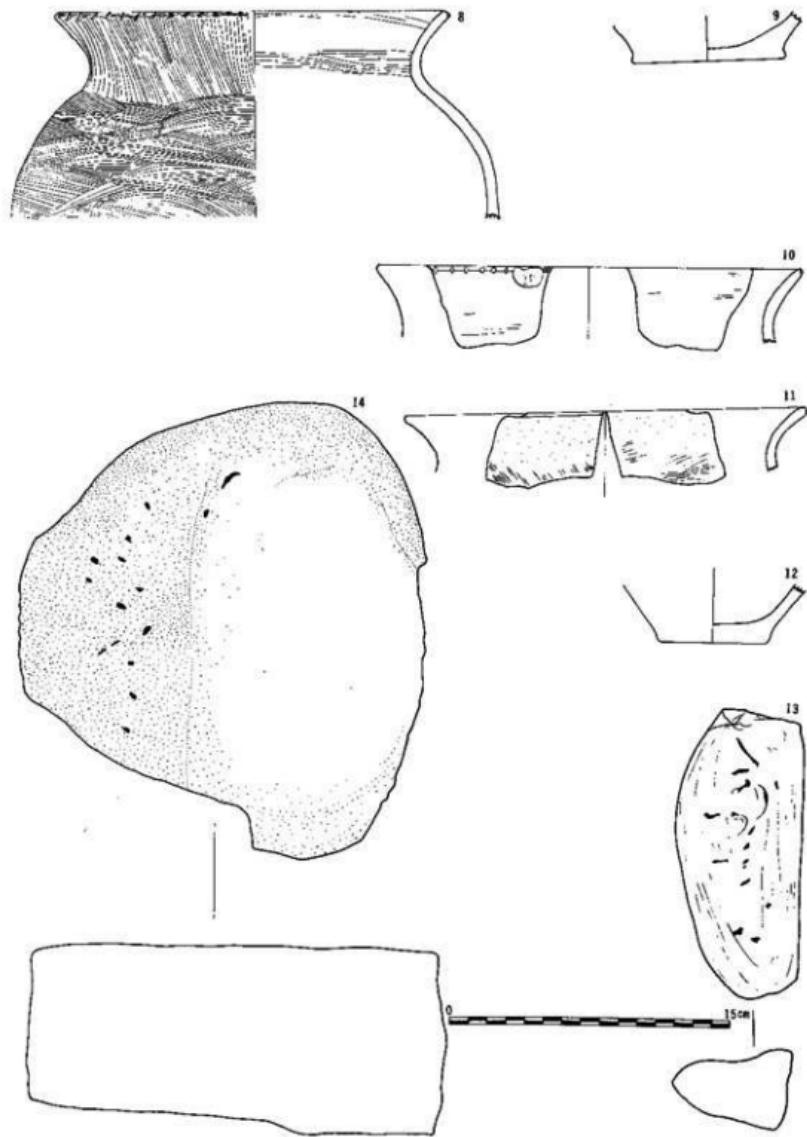
1. 口付壺形土器

口縁部と脚部端が欠損しているため全体の正確な大きさは測りようがないが、現存する範囲での大きさは、口径16cm、器高26cm、胴最大径25cm、底径7cm、器厚約1cmを測る。

胴上半部は、やや丸味をもつが、胴下半部から、ややゆるやかに移行して脚部に至っている。土器表面の胴部のはば全面は、縦条、横位、斜行と不規則に入り乱れた、櫛状土器による甕



第16図 Y 1 住居址出土遺物 (1.2床直上)



第17図 Y-1 住居址出土土器・石器 (8.14床直上)

形痕がみられる文様のようであるが、これは、土器製作過程における整形の跡であろう。

脛部の一部には、ヘラによる器面調整がみられる。

器内面にも、ヘラによる調整が施されている。胎土に砂粒が含まれ、やや荒い感じがする。

焼成は普通、色調は茶褐色を呈し、表面及び内面の一部に煤の付着がみられる。

3. 壺形土器

胴下半部が欠損し、単純口縁を有し、やや内傾している。口縁部に刷毛目整形のち磨消手法が行われている。

器表面に、焼成直後に一部分急激な冷却が加えられたためであろうか、黒く斑点が残っている。器面には、円彩されている。

内面は、口縁部に、横位の刷毛状工具による整形痕がみられる。

胎土は、しまり、焼成は良い。色調は、赤褐色を呈する。

4. 脚部

高杯型土器の脚部であろう。脚部は縦条の刷毛目整形痕がみられ、脚部内側は横位の刷毛目整形痕がみられる。

胎土は砂粒が含まれ、焼成は普通、色調は表面は灰茶褐色で内面は茶褐色を呈する。

5. 瓢形土器

胴下半部が欠損している。外反した口縁が頭部で「く」の字状に屈折し、脣部に最大径をもつものであろう。口唇部には刻み目が施されている。

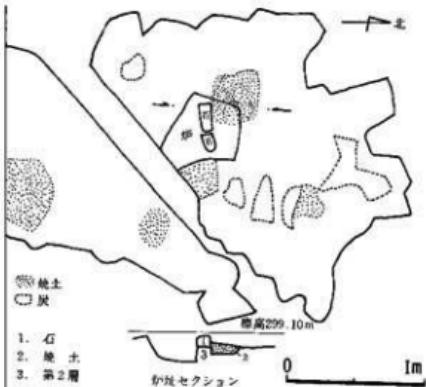
口縁部は縦条の刷毛目で仕上げられ、頭部には彫状工具によって横位に何回も短かく分けて整形した痕が残されている。

内面は、口縁部に横位の刷毛目整形痕が残っている。

焼成は良く、色調は茶褐色で、表と内面の一部に煤の付着がみられる。

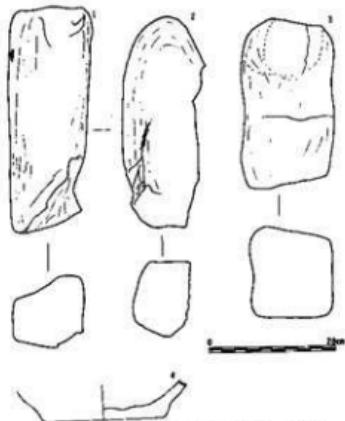
Y 1 号 住居址 出土 遺物 説明表						
番号	器 形	形 態・製 作 技 法 の 特 徴	色 調	出 土 層	備 考	
1	台付甕	口縁部と底部を欠損する。刷毛目が明瞭であり、窓による調整もみられる。最大径は胴部上半にあり、胎土はやや荒い。	茶褐色	床直上	遺物No1	
2	台付甕	ほぼ完形。口唇肩部に胴部の刷毛目と同じ施文具による刻みが入れられている。最大径が胴部中央にあり胴部が着るしく張って球形を呈す。	黒褐色	床直上	遺物No2	
3		精選された胎土をもち焼成堅緻。丹が塗られ、すすも付着している。	赤褐色	床直上	遺物No5 すす付着 丹彩	
4	台付甕	底部、刷毛目が残る。表面は、それほどでもないが器内には砂粒が極めて多い。	外灰褐色 内赤褐色			

番号	器 形	形 態・製 作 技 法 の 特 徴	色 調	出 土 層	備 考
5	甕	口縁部破片。口唇肩部に構造点列文がある。胎土は密で焼成堅緻である。	茶褐色	覆 土	
6	甕	S字状口縁を呈す。1段目の凹みの所は橢円状の点列文がありその下の隆起には、爪と思われる刻みが入っている。胎土緻密にて焼成良好。	赤褐色	床直上	
7	甕	口縁部破片。口唇部肩に刻み目が入っている。表は刷毛目若干、裏は明瞭。	灰褐色	床直上	
8	甕	胴部下半を欠損する。口唇肩部に胴部と同じ施文具による刻み目がある。外面と内面上端にすすが付着。最大径は胴部中ほどにある。	茶褐色	床直上	遺物 No.3,4 すす付着
9		底部。小石、砂の混入が甚しい。刷毛目があとのナデつけで消えている。	茶褐色	覆 土	
10	甕	口縁部破片。口唇肩部に刻み目がある。胎土は密だが摩耗著しい。	灰褐色	覆 土	
11	甕	口縁部破片。表面摩耗が著しいため砂粒が表面にうきでている。若干刷毛目が残存できる。	外灰褐色 内黄褐色	覆 土	
12		底部破片。胎土に砂粒の混入著しい。内面に刷毛目が若干つく。	黑色 表黄褐色 内灰褐色	覆 土	
13	石 器	安山岩		床直上	遺物No.7
14	石 器	安山岩	緑がかつた褐色	床直上	遺物No.8



第18図 Y-2住居址平面図

Y-2住居址 (第18図)
床面と覆土に焼土や炭化物が非常に多かった。火災にあった住居ではないかと思われる。周囲と床面を複雑に擾乱されており、中心の帯状擾乱で住居址の床面は分断されている。周囲の壁(立上り)は全然残存していない。柱穴も発見出来なかった。炉址も擾乱を受けていて、完全な形をとどめているが、Y-1住居址と同じように2つの部分から構成されている。一方は浅くて焼土があり、一方は深くて焼土がな



第19図 Y2住居址出土土器・炉石

く、二方の中心を棒状の石で区切っている。

土器破片が少量出土しただけである。

Y2住居址出土遺物（第19図）

壺形土器

壺形土器の底部破片である。

器表面は刷毛状工具により縦条を主体とした整形痕がみられる。内面は、内底を除いて横位の刷毛目がみられる。

胎土は、砂粒の混合が多く、色調は赤褐色を呈する。

Y3住居址（第20図）

最も東にある。この付近は遺構群がある地域で最高所である。

周囲を耕作によって著しく擾乱されていて、床面がわずかに残存しているにすぎなかった。

遺物も少なく、第21図の埋甕が1個だけである。

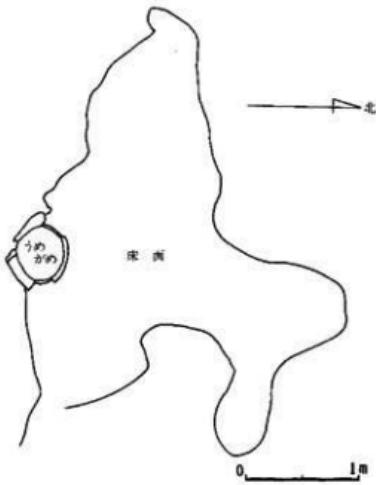
Y3住居址出土遺物（第21図）

1. 台付壺形土器

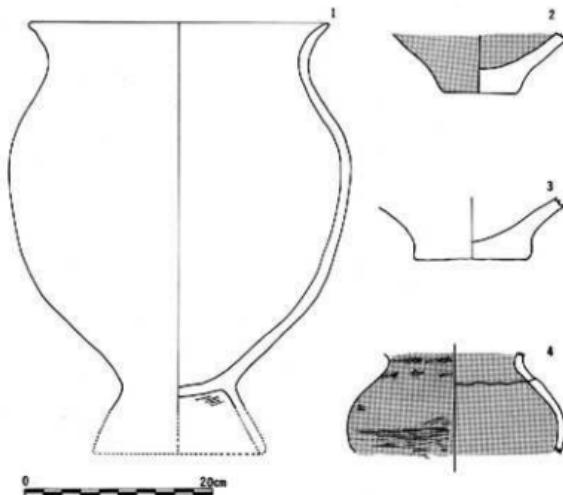
脚縁端部が欠損しているが、ほぼ珠形に近い胴部をもつ無文土器である。器表面は、磨消手法を用いて整形されている。焼成は良好、胎土は若干の雲母の混入がみられ、色調は茶褐色を呈する。

4. 壺形土器

やや丸味をもつ胴部中央の破片である。破片全体に円彫が施されている。焼成は良好である。



第20図 Y3住居址平面図



第21図 Y3住居址出土遺物（1.埋甕）

Y4住居址（第22図）

この住居址がある付近に住居址が多くあり、重複もしている。著しく擾乱しているためこの住居址の全貌はわからない。Y5住居址とSD-1との間に挟まれているが、SD-1との前後関係はわからない。Y5住との前後関係も、両者の床面高低差がほとんどないためわからない。Y5住の改築による拡張とみることも出来るが、不自然でもある。

遺物は土器破片が少量出土している。

Y4住居址出土遺物（第23図）

1. 壺形土器

折り返し口縁をもつ壺形土器の破片である。

口縁部には、縦5本の粘土紐による隆帯が貼付してある。器表面は磨耗が著しい。胎土は細砂粒を多量に混入している。色調は、茶褐色を呈し、器内面は灰褐色をしている。

2. 壺形土器

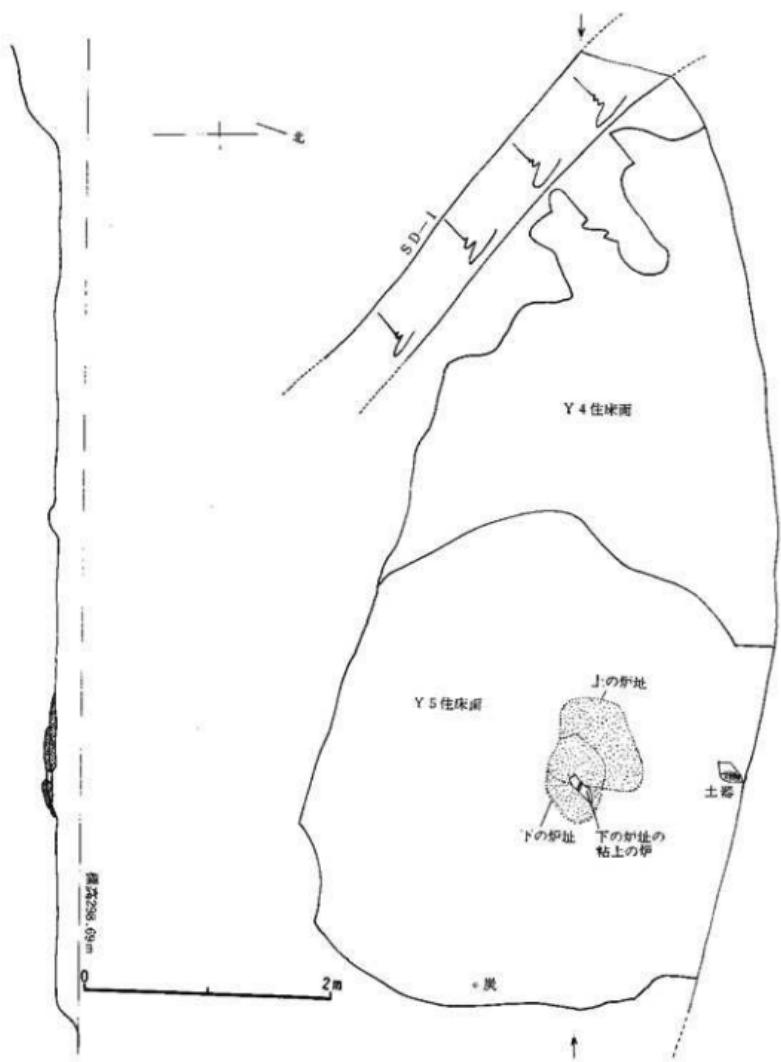
底部の破片である。土器表面に、底部直上から不規則な刷毛目整形が残されていて、上部には横位の刷毛目調整が施されている。器内面は、不規則な刷毛目で仕上がられている。

焼成は良好、色調は表面は茶褐色、内面は灰褐色を呈する。

3. 壺形土器

胴下半部を欠損、口縁は折り返し口縁をもつ壺形土器である。

口縁部に刻みをつけた棒状浮文が口縁をめぐるように4本貼付され、そのうち2ヶ所は9本



第22図 Y4 住居址、Y5 住居址平面図及びセクション図

を1組とし、他の2ヶ所は10本を1組として貼られている。

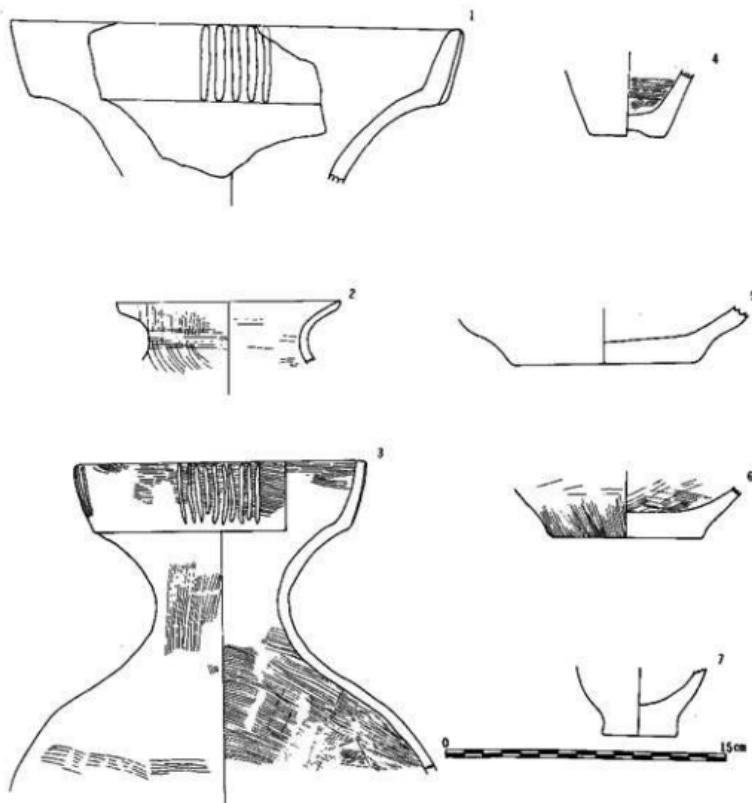
口縁部に横位の刷毛目整形が施され、頸部にも縦条の刷毛目整形があり、腹部は横位の刷毛目整形のあとと、それぞれヘラ磨きがかけられている。

胸部内面には、横位の刷毛目を主体として器全体に整形痕がみられる。

胎土は砂粒が混入しており、焼成は普通、色調は茶褐色を呈する。

2. 壺形土器

単純口縁を有し、頸部から大きく「く」の字に外反する口縁をもつ壺形土器の破片である。



第23図 Y 4 住居址付近出土遺物

1. D11・12溝の中。2. 表技。3. Y4号住サブレンチ。4. D12溝の中。5. E12。
6. D12溝の中。7. D12。

頸部は、横位と縦条の刷毛目整形痕がみられ、全体に粗いヘラ磨きが施されている。

器内面は、横位の刷毛目整形痕が残る。色調は暗茶褐色を呈し、口縁部直下の器表面に煤の付着が著しくみられる。

Y 4 号 住 居 址 出 土 遺 物 説 明 表					
番号	器 形	形 態 、 製 作 技 法 の 特 徴	色 調	出 土 層	備 考
①	壺	折り返し口縁で口縁部に5本の粘土隆帯が貼付けられている。緻密な胎土であるが摩耗著しくもらい。	茶褐色	覆 土	
②	壺	口縁部破片、頭部に横に構目状線をつけ、この上下にハケ目痕がある。比較的厚手。			
③	壺	胴部下半を欠損する壺形土器。口縁部に9本9本10本10本と4ヶ所に沈線が施されている。口縁部はナデ痕鮮明。	茶褐色	サブトレ	
4	壺?	上げ底になる底部。胎土は緻密にて焼成良好。内面に刷毛目が明瞭。	外黄褐色 内底灰褐色	溝	
5	壺?	底部破片で、比較的厚手であるので壺の底であろうか。			
6	壺?	底部破片、ハケ目痕がみられ厚手である。			
7	壺	底部破片、No.4に類似しているが上げ底ではない。			

Y 5 住居址 (第22図)

Y 4 住と接していて、それとの関係も明確に把握出来ない。Y 5 住居址東側の壁が少し残存しており、床面はしっかりしている。柱穴は見当らない。炉は前後2回に造られていて、前回の炉は、Y 1 住、Y 2 住にみられるように棒状粘土で中心を区切っている。

遺物は、北側から土器の口縁部等が多く出土した。この中の一つの口縁部破片の中から炭化米5粒が検出された。

Y 5 住居址 (第24図)

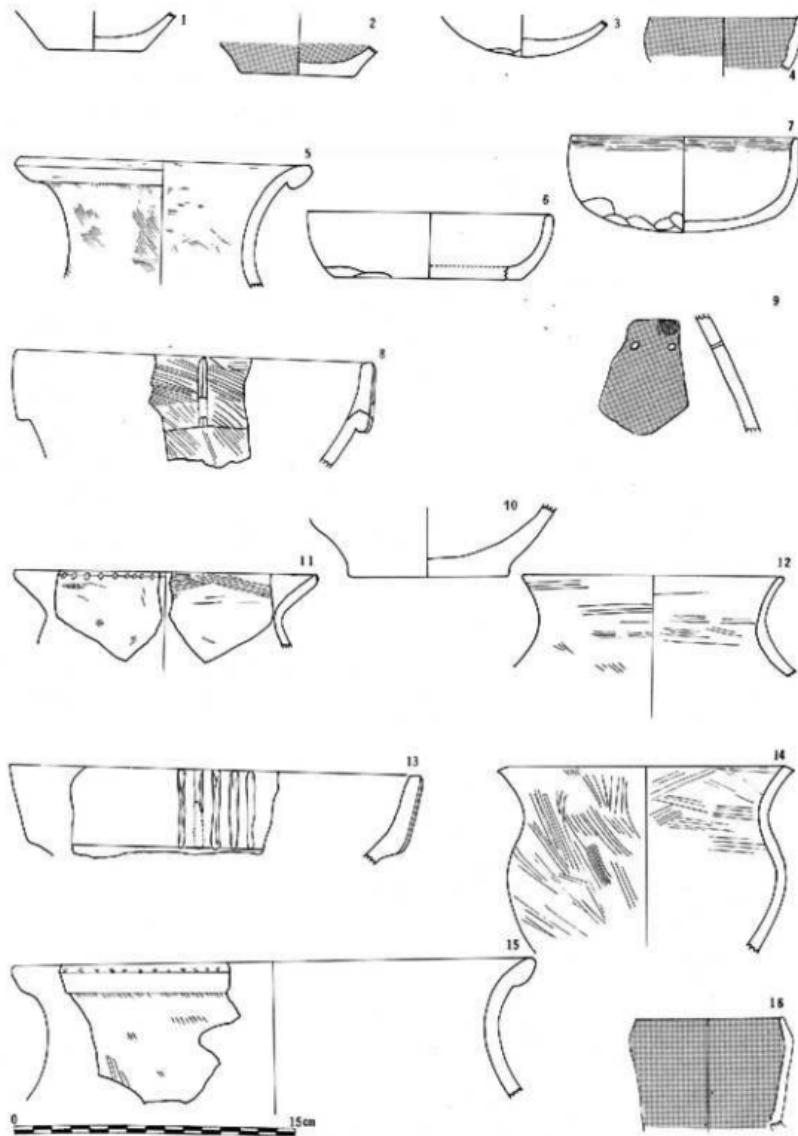
5. 壺形土器

口縁部から頸部にかけての破片である。珠形の胴部から立上って軽く外反し、口縁部へと続く。口縁部は、折り返し口縁を有する。

口唇部は斜めにそぎとられたような形をしている。口縁部は折り返し口縁である。

頸部には、斜行の刷毛目整形痕がみられる。色調は赤茶褐色を呈し、焼成は良い。

南斜面No.1～No.2 グリット中間点の出土の土器。



第24図 Y 5 住居址出土遺物

7. 杯形土器

ほぼ完形品の杯型土器で、器高5.1cm、口径12cm、器厚約0.3cm、底径2cmを測る。

器表面に焼成直後に、より急激な冷却が加えられたためであろうか、黒い斑点が残っている。

表面は縦条の刷毛目整形痕が残り、内面の台部の部分は、表面よりかなり粗く、横位の刷毛目整形がなされ、胴部には軽く横位の刷毛目が残っている。

焼成は良く、胎土は砂粒が多く含まれている。色調は白色がかった黄褐色を呈する。

Y 5 号 住 居 址 出 土 遺 物 説 明 表					
番号	器 形	形 态、製 作 技 法 の 特 徴	色 調	山 土 層	備 考
1		底部、窪削りがみられる。底部の少しと側面 $\frac{1}{4}$ ほどにすすが付着している。	外赤褐色 内黄褐色	溝	すす付着
2		底部、表裏ともに丹が塗布されている。砂も含まれているが表面は滑らかである。	赤褐色	溝	丹 彩
3	椀	椀形土師器の底部。底面に方向が一定な窪削りがなされている。胎土は緻密にて焼成堅緻である。	茶褐色 一部黑色		
4		口縁部から2cm下で屈曲しており、そこから器内が厚くなっている。表は口縁下2cmまで裏は全面丹が塗られている。	赤褐色	溝	丹 彩
5	壺	折り返し口縁。外面は摩耗激しく内面は裏磨きで光沢を放つほどである。胎土は緻密で焼は堅い。	赤褐色		
6	椀	椀形土師器、底面は窪削りがなされ他は壺で磨かれている。胎土は精選され密である。	赤褐色		
7	椀	椀形土師器。底部は窪削りがなされている。他はナデによる調整がある。胎土はこの期のものとしては普通。	茶褐色	第Ⅰ層	
8	壺	壺形土器口縁。折り返し口縁である。刷毛目がよく残っている。帯状粘土が一本貼付されている。	赤褐色	第Ⅱ層	
9	高 杯	高杯破片。穿孔が2個ある。両面が塗られている。割と荒い胎土だが表面は滑らかである。	赤褐色	第Ⅱ層	丹 彩
10		底部破片。器面調整が窪で表裏ともに行なわれている。底部に3本の沈線がある。底から側面にかけすすがついている。	黒褐色	覆土上	すす付着
11	壺	壺形土器口縁部破片。口唇肩部に横状工具による刻みがつけられている。すすが付着している。	外黒褐色 内茶褐色	溝	すす付着
12	壺	壺形土器口縁部。内面頸部以下にすすの付着がみられる。小粒の砂が胎土に多量に入れられている。	褐色	溝	すす付着
13	壺	折り返し口縁。粘土帯による貼付文が5本口縁部につく。小さい砂を多量に含むため表面磨耗が著しい。	外赤褐色 内灰褐色		

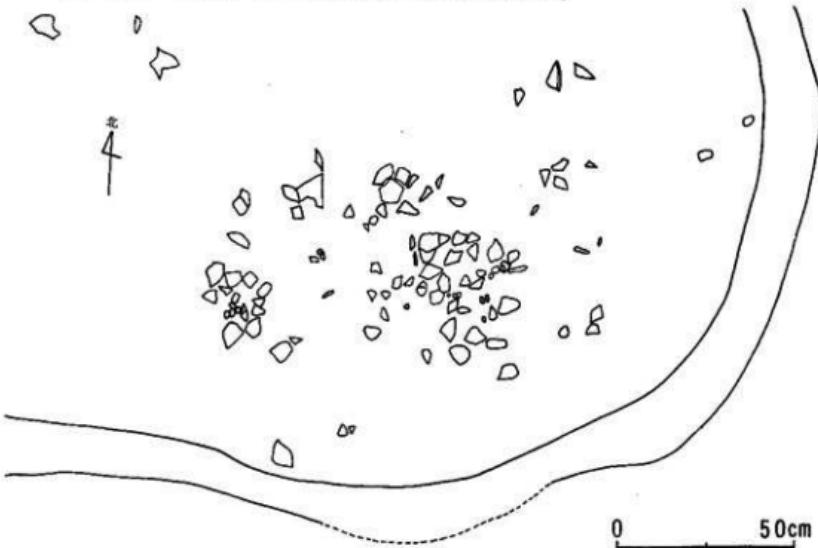
番号	器 形	形 態・製 作 技 法 の 特 徴	色 調	出 土 層	備 考
14	甕	角ばった口唇部を呈す。最大径は口径にある。表面胸部に一部すが付着している。	褐 色	第Ⅰ層	すす付着
15	甕	折返し口縁の比較的大きな甕形土器の口縁部破片。口唇の肩部に擦痕による刻み目がつけられている。ハケ、ナデによる調整がなされている。	茶褐色		
16	壺?	壺形土器の口縁部か。口径下1cmの所で屈曲している。胎土は荒く、両面丹が塗られている。	赤褐色	溝	丹 彩

Y 6住居址（第25～30戸）

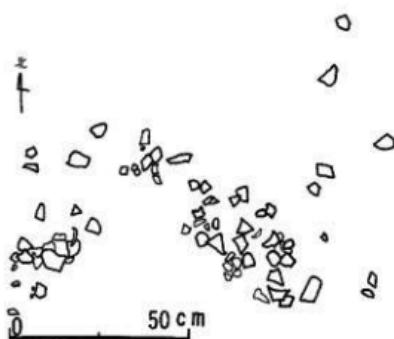
床面及び壁の一部分が検出され、その中に住穴と思われるビットが1ヶ所あった。この床面に統く北側には幾重にも重なった床面、焼土の広がり、炭化物、遺物等が検出されたが、擾乱を受けていて、遺構としてのまとまりがつかめなかった。

この中の一部分には極めて堅固な床面が中心となり、周囲に離れる程徐々に軟弱となり、ついには床面の切れ目がはっきりしないで、なくなるような所もあった。またこの付近には焼土、炭化物に混入して粘土や陶土のブロックも3～4ヶ所見られ、あたかも土器を製造した遺構でもあるかのようにも思われた。

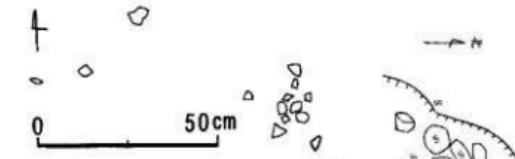
Y 6住には細かい土器片がブロックをなして、覆土の中にあった。



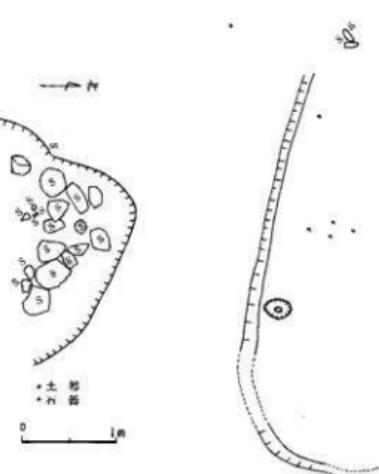
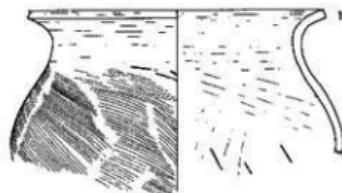
第25図 Y 6住居址土器出土状況（上層）



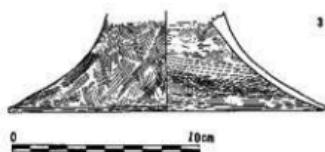
第26図 Y6 住居址土器出土状況（中層）



第27図 Y6 住居址土器出土状況（下層）



第28図 集石址とY6 住居址平面図



第29図 Y6 住居址出土遺物



第30図 Y6 住居址出土遺物

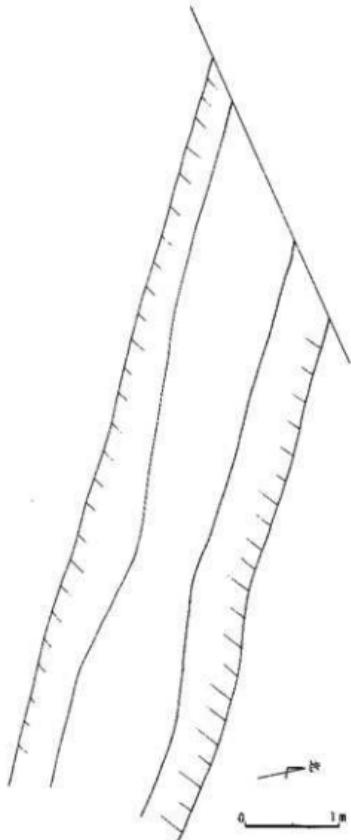
第2節 その他の遺構と遺物

SD-1 (溝・第31図)

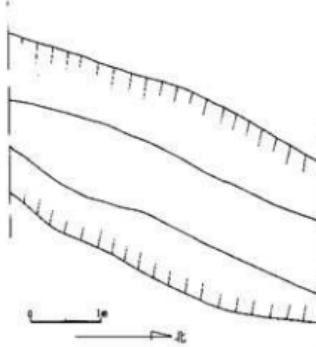
U字状を呈する巾約2m、深さ約50cmの溝である。一方の端は道路敷外となり、一方の端はブルドーザーでカットされていたため、その全長については全く不明である。発掘した長さは約6.5mである。

遺物は溝の覆土から完形の埴と土器片が出土した。溝が掘られた時期は確定出来ないが遺物と出土状態等から推測すると、住居が構築された時期に続くものと思われる。

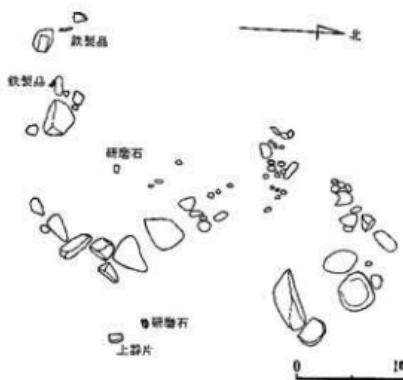
SD-2との関係についても從って不明である。



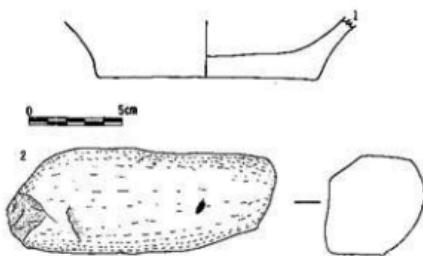
第31図 No.1 溝 (SD-1) 平面図



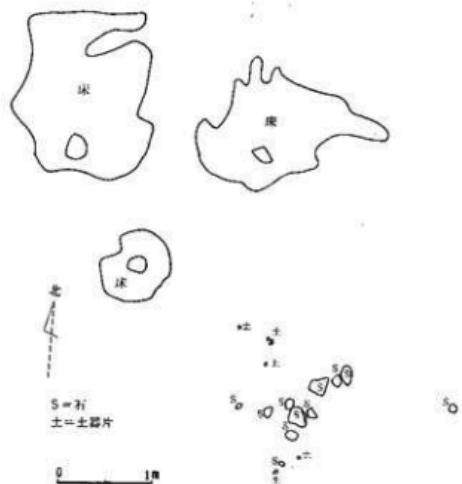
第32図 No.2 溝 (SD-2) 平面図



第33図 集石址 平面図



第34図 集石址出土土器・石器



第35図 C9・10グリッド確認床面図

第一層出土遺物（第37図）

8. 壺形土器

壺形土器の口縁部破片である。口縁部は外反し、口唇は若干折り返して、わずかに綫をもち頸部は「く」の字状に屈折し、胴部へ移行する。

器表面は、細かな刷毛目整形がなされ、口縁部は横位の刷毛目で仕上げられ、頸部は縦条の刷毛で整形後、ヨコナデされている。

器内面は、横位ないし、斜行の細かい刷毛目整形が施されている。

胎土は、砂粒を含み、焼成は良好であり、色調は、表面は暗褐色で、内面は茶褐色を呈する。

SD-2（第32図）

SD-1の約10m東にあり、これとやや直交する方向で掘られている。形状はSD-1と同様で、やはり全体を発掘出来なかつたので全長については不明である。

遺物は北よりの覆土から土器片が出土した。

この構についても、その掘られた時期はSD-1と同時期と考えられる。

この性格や機能については不明である。

集石造構（第33・34図）

造構群の上部（南）に位置する。長さ8mの不定形なプランで、深さ約1mの穴に小は拳大、大は遺物箱の大の自然石が乱雑に入っている。その時期・性格については全くわからない。

最後に造構に作出しない遺物として、第一層出土遺物と各グリッドに分けて以下に説明する。

13. 球形土器

球形土器の頭部破片である。器表面に斜行の刷毛目整形が3回ほどに分けて行なわれている。頭部下部に、LRの細かい繩文が帶状にこれをめぐるように施文されている。

内面には、頸部上部に繩文LRが帶状にめぐり施文されている。下部は、ヘラ状工具を用いて、横位に研磨がなされている。

輪積痕が認められ、焼成は普通、色調は茶褐色で一部赤褐色を呈する。

14. 壺形土器

口縁部は、外反し、口唇部は、若干折り返してあり、わずかに綫をもち、指頭でヨコナデしている。

頭部は、大きく外反し、ラッパ状を呈する。

頭部に最大幅を有する珠形の壺形土器の口縁部破片である。

頭部表面に、二個一対の装飾ボタン状凸起があり、横位の整形痕がみられるが、かなりアバタ状に崩落が著しい。

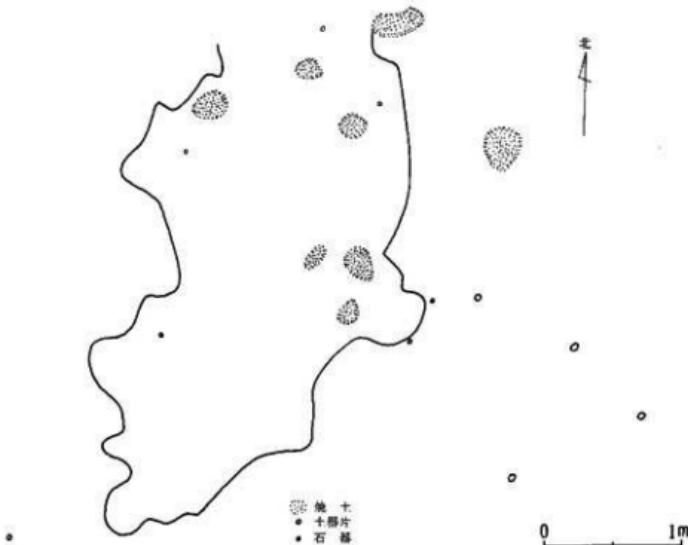
土器内面は、口縁部から頭部にかけて、横位の山形をした刷毛目整形がなされた後、ヘラで磨削手法によって仕上げられている。

胎土に、石英、雲母の粒子がみられ、焼成は普通、色調は器表面は茶褐色で、内面は淡褐色を呈する。

第I層出土遺物説明表

番号	器 形	形態・製作技法の特徴	色 調	出土層	備 考
1	高杯	高杯破片。括れ部分が盛り上がる。脚部上部共に両面丹が塗られている。	淡褐色	第I層	丹 彩
2	高杯	高杯破片。脚部はあまり開かないようである。括れ部分が一度盛り上がっている。内側に丹が塗られている。	茶褐色	第I層	丹 彩
3	高杯?	高杯と思われる破片。脚部内面以外丹が塗られている。括れ部分には箒の調整痕が残る。	赤褐色	第I層	丹 彩
4		底部破片。内側の腹は明確でなく丸底である。石英、長石の混入が多い。	外灰褐色 内赤褐色	第I層	
5	甕	小形甕形土器の口縁。口唇部に櫛状工具による刻み目があるが摩耗する。刷毛目のあとナデが行なわれている。	黒褐色 灰褐色	第I層	
6	甕	口縁部破片。口唇部に刻み目が強く施されて波状を呈す隆起のようになっている。刷毛目が残るが表面は摩耗が著しい。	外赤褐色 内黄褐色	第I層	
7	甕	口縁部破片。S字状の有段口縁を呈す。雲母が混入されているが胎土良好、焼成堅緻である。	外黒褐色 内茶褐色	第I層	

番号	器 形	形 態・製 作 技 法 の 特 徴	色 調	出上層	備 考
8	壺	折り返し口縁。刷毛目が明瞭。胎土は細かい砂が含まれている。	外暗褐色 内暗赤褐色	第1層	
9	甕	小形甕形土器。表面のみ刷毛目が若干残る。	灰褐色	第1層	
10		底部破片。器面調査が急入りになされてつるつるしている。	灰褐色	第1層	
11	壺	頭部。全体的に刷毛目のあと横方向のナデがつけられている。砂粒の混入は割と多い。	黄褐色	第1層	
12	甕	口縁部破片。口唇部に刺み目がある。刷毛目が縱方向に全体的に表面には入れられている。	黒褐色 灰褐色	第1層	
13	壺	頭部。口縁内面にL.Rの細かい繩文がつく。肩部にも厚体L.Rの細かい繩文がつき、内面には箆調整の跡があり、輪縁の接合痕も看取できる。表面は平滑で焼或堅硬なり。	黄褐色 一部赤褐色	第1層	
14	壺	折り返し口縁を除す。ボタン状の貼付が肩部に摩耗著しく不明瞭ながら看取できる。石英雲母等の砂粒が目立つが表面は平滑だがあたたかく崩落が激しい。	外黄褐色 内淡褐色	第1層	



第36図 D10・11グリッド確認床面図

各グリッド出土遺物（第38・39図）

16. 瓢形土器

口縁部と底部を欠いた瓢形土器である。

器形は、最大幅を胴部下半にもち、珠形を呈する。器表面の胴部のはば全面を櫛状工具によりなで、不規則に入り乱れた整形痕が顕著にみられる。これは、土器製作過程における整形の跡であろう。

器内面は、横位の櫛状工具による整形痕がみられ、口縁部と底部の欠損は、粘土紐の接合部から壊れたものと考えられる。また粘土紐による輪積痕が3ヶ所以上にみられる。

焼成は良く、色調は、表面は茶褐色で、煤の付着がみられる。内面は、暗灰褐色を呈する。

7. 壺形土器

完形品である。土器は、口径13cm、器高16cm、胴部最大径13.6cm、底径8cm、器厚約1cmを測る。器形は、最大幅を胴部中央にもち、頭部から口縁にかけて「く」の字に外反している。

土器表面の口縁部は、横位の刷毛目整形が施され、胴部は刷毛目整形のあと、ヘラでかなり念入に磨消手法で調整している。部分的には刷毛目あとが残っている。

内面は、刷毛状工具による整形痕がみられる。

胎上は、砂粒が多く含まれ、焼成は普通。色調は、表面は茶褐色で、内面は灰褐色を呈する。

22. 壺形土器

壺形土器の口唇部から頭部にかけての破片である。

折り返し口縁を有し、口唇部は、繩文LRが施文されている。

器形は、おそらく胴部は珠形であろう。その上に太く短い頭部、そして大きく開いた口縁につながり、特に口縁部を折り返している。そして文様に特徴がみられる土器であろう。

文様は、口縁部に、中央やや上部に繩文LRとRLが併用された文様が施文され、その下部に、横S字状の結縁繩文が施されている。

またその下部は、横位の刷毛目整形で仕上げられている。

なお、口縁部をめぐって縦に粘土紐による文様が5本、6本、7本、8本と5ヶ所にそれぞれ貼付されている。

頭部は、刷毛状工具のような施文具で、斜にいったん止め、また引くといった手法で弱く流れるように、刷毛目が施されている。

器内面は、ヘラで調整し、なめらかな器面をつくっている。

胎土は、砂粒を含み、焼成は良好、色調は茶褐色を呈し、内面はやや灰色がかかったようで、一部に煤の付着がみられる。

23. 壺形土器

口縁から頭部の一部にかけての破片で、壺形土器の折り返し口縁を有するものである。

折り返し口縁は、幅広く大きい。口唇部は繩文が施文され、口縁部は、繩文LRが斜行し、

9 本以上の粘土紐による降帶が縦に、2ヶ所以上貼付してある。

繩文の文様の中に、ヘラで斜めに整形されている。

口縁下部には、織維状の施文具により爪型の文様が連続して刻まれている。頭部は、ヘラ調整痕が残されている。

器内面は、斜及び横位の刷毛目整形痕がみられる。

胎土は、砂粒を含み、焼成は普通、色調は茶褐色を呈する。

28. 噌

丸底壺型土器の中型の完形品である。土器は、口径10.6cm、器高16.6cm、器厚約1cmを測る。珠形に近い胴部をもち、鋸角的に外反する口縁を有する。

器表面は、刷毛目整形ののち、ヘラ磨きをかけ、器面を丁寧に調整している。

器内面は、刷毛状工具による整形痕がみられる。

胎土は、精選された土に若干の砂粒が含まれている。焼成は良好、色調は表面はやや黄色がかった赤褐色で、口縁から胴部にかけて一部に煤の付着がみられ黒色を呈する。

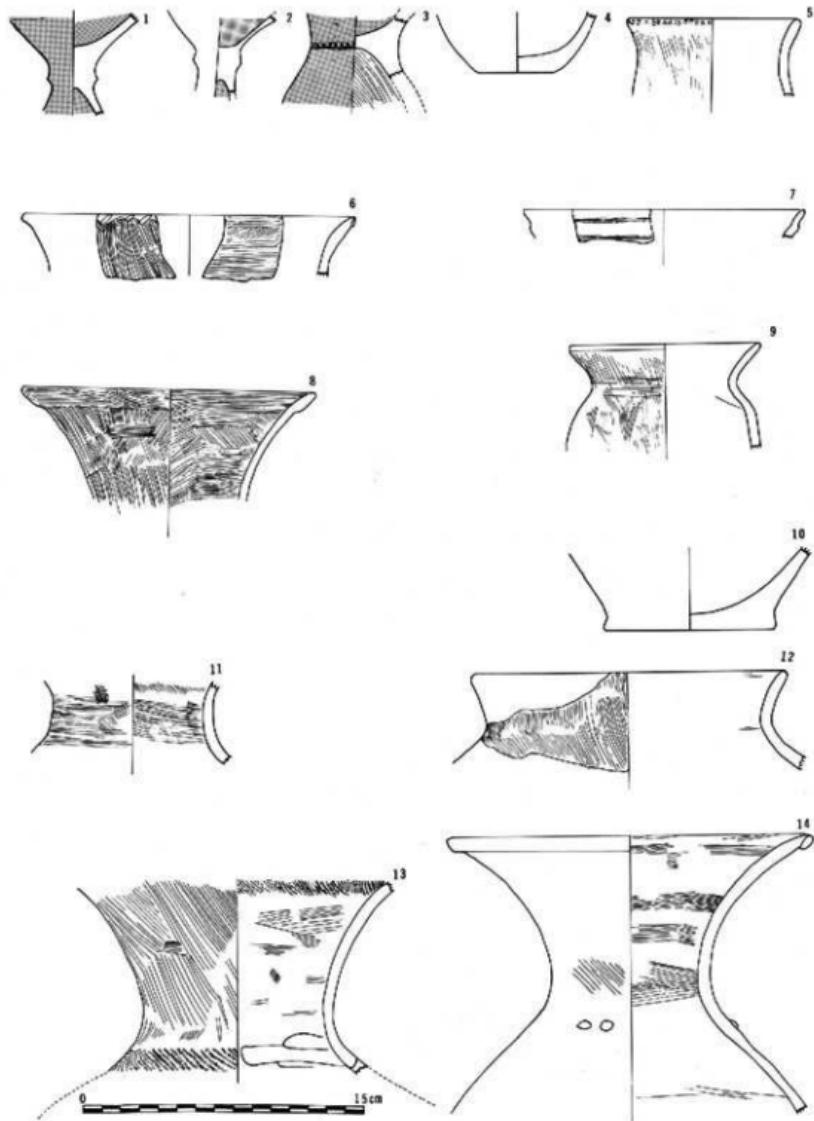
内面は、灰色かかった赤褐色である。

各 グ リ ッ ツ 出 上 遺 物 説 明 表					
番号	器 形	形 态・製 作 技 法 の 特 徴	色 調	出上層	備 考
1		小形七器の底部。内面に半截竹管状の押圧痕がわざかに認められる。砂粒の含有は少く胎土は緻密である。	灰褐色	第Ⅰ層	
2	壺か?	壺と思われる底部破片。弱い横などで表裏にみられる。内側は丹が塗られている。	黒褐色	第Ⅱ層	丹 彩
3	壺か?	壺と思われる底部破片。荒削りと箆ナデが縦になされている。	外黒褐色 内赤褐色	第Ⅱ層	
4		底部破片。刷毛目が内面に残る。砂粒が多く含まれている。底部内面中心が若干盛りあがっている。	茶褐色	第Ⅱ層	
5	杯	須恵器底部。内側にはろくろの整形痕が明瞭で段状になっている。底部は平らでなく不安定。	灰 色	第Ⅰ層	
6	蓋	須恵器の蓋の破片。表面は $\frac{1}{3}$ 程度灰釉がかかるが全体的にあたたかさである。内側に段がつく。	灰 色	第Ⅰ層	
7	壺か?	壺部破片。幅広の刷毛目が内側に横走する。胎土は密で外面は摩耗が著しい。	黄褐色	焼上中	
8	大形壺	壺形は相当大きな壺の底部である。中央がやや凹む底部であり、小石や砂の混入が著しい。	外黄褐色 内赤褐色	第Ⅰ層	
9	台付壺	台付壺の底部。表裏ともに刷毛目が浅くやや残る。小さな砂が少し入る。すすが台上部に付着している。	赤褐色	第Ⅱ層	すす付着

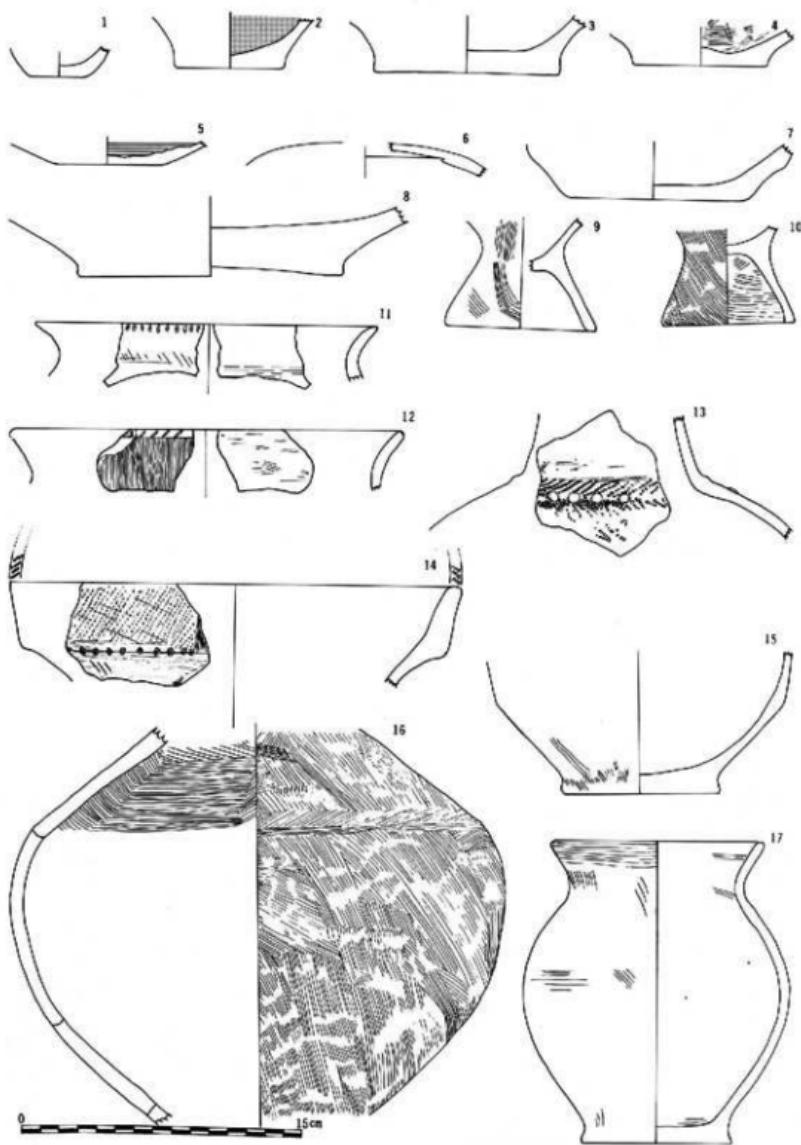
番号	器形	形態・製作技法の特徴	色調	出土層	備考
10	台付甌	台付甌の底部。内外とも刷毛目が明瞭に残るが甌部内面にはみられない。砂粒を含み焼きは堅緻で表面は平滑である。	灰褐色	第Ⅰ層	
11	甌	甌形土器の口縁部である。内外面とも刷毛目がわずかに残る。口唇部に櫛状工具での割み目がつけられている。	赤褐色	第Ⅱ層	
12	甌	甌形土器の口縁部。表には明瞭に刷毛目がつき裏はわずかに残る。口唇には鋸い工具による割み目が施されている。	外黒褐色 内灰褐色	第Ⅱ層	
13	甌	甌形土器の頸部から胴部。この境には段がつき、櫛状工具による擬似繩文が羽状につけられ、羽状の境にボタン状の粘土が4つつく。	黄褐色	第Ⅰ層	
14	甌	折返し口縁。口縁部と口唇にLRの繩文があり唇曲部分に櫛状工具による割み目がある。刷毛目がわずかに残り隆脊が縦についた痕跡がある。砂粒が頸と多く混入されている。	灰褐色	第Ⅱ層	
15	甌	底部。刷毛日の上にヘラ削りの跡がみられる。外面底部にすすが付着。底部に6個の種子痕のようなものがみられる。	外茶褐色 内黒褐色	粘土ブロック	
16	甌	底部と口縁部を欠損している。刷毛目が残された後ナデが行なわれている。輪縫既ら明瞭で唇面部の複合部の断面にも刷毛目がみられる。すくも所々に付着しており、内面上面に集中したあばた状の凹凸がある。最大径は底部下半にある。	外茶褐色 内暗灰褐色	第Ⅰ層	すす付着
17	甌	甌形土器の完形品。刷毛目がわずかに残る。砂粒がわりと多く胎土に含まれている。最大径は胴部中央にある。	外茶褐色 内灰褐色	第Ⅱ層	
18		底部破片。内外両面に丹がぬられているが内面の方が残り状態がよい。内面に範削りが施されている。	茶褐色	第Ⅰ層	丹彩
19	甌	小形甌の口縁。口唇内面と横、外面は縱の刷毛目。胎土は密だがもろい感じがする。	淡褐色	第Ⅰ層	
20	甌	頸部、肩部破片。刷毛目の調整後若干のナデツケが行なわれている。胎土は緻密。	外茶褐色 内黒褐色		
21		口縁部から胴部にかけ刷毛目。裏面は丹が塗られている。	黒褐色	第Ⅱ層	丹彩
22	甌	折返し口縁。口唇にLRと口縁にLRとRLの繩文、胎土による貼付文が5、6、7、7、8木と5ヶ所にある。口縁部下方には連続S字状粘接縫文がぐる。石突を主とした砂粒を多く含む。	外茶褐色 内灰色 一部黒色	粘土ブロック	
23	甌	口縁部四方に10本単位の太い沈線がある。刷毛目が残り内面は範削りがみられる。胎土は密で焼は堅い。	茶褐色	サブトレ	

番号	器 形	形 態・製 作 技 法 の 特 徴	色 調	出 土 層	備 考
24	壺	折返し口縁。口縁、口唇共に繩文LRが施され、9本以上の粘土紐貼付文が2ヶ所以上ある。刷毛目もわずかに残り口縁部下方に織維表状の压痕文がある。	灰褐色	溝	
25	壺	頸部。2条の沈線で刷毛日の粗密の程度に差がある。胎土は砂の混入が割と多い。	茶褐色	溝	
26	壺	口縁部。表は刷毛目が裏はナデによる擦痕が明瞭。	赤褐色	粘土ブロック	
27	甕	小形變形土器。頸部の彎曲がわりと緩やかである。胎土は緻密で少量の石英砂が入る。	赤褐色		
28	壺	丸底變形土器の完形品。刷毛目が底部にわずかに複りナデで調整しており、底部が瓶に口縁から頸部、頸部から底部となされ、光沢を放つほどである。胎土は緻密にて焼成良好。	外赤褐色 一部黒色 内灰褐色	S D - 1	すす付着
29	甕	やや傳手のわりに大きい變形の口縁。胎土は密だがもろい。	灰褐色		
30	壺	壺と思われる底部。表裏ともに丹が塗られている。底面には木葉痕がある。4mmほどの小石の混入がみられる。	赤褐色		丹 彩

以上遺構と遺物について述べたが、遺構は森が、遺物の説明は渡辺が、説明表は国学院大学生等がそれぞれ分担して著述した。（遺構 森和敏・遺物 渡辺礼一）

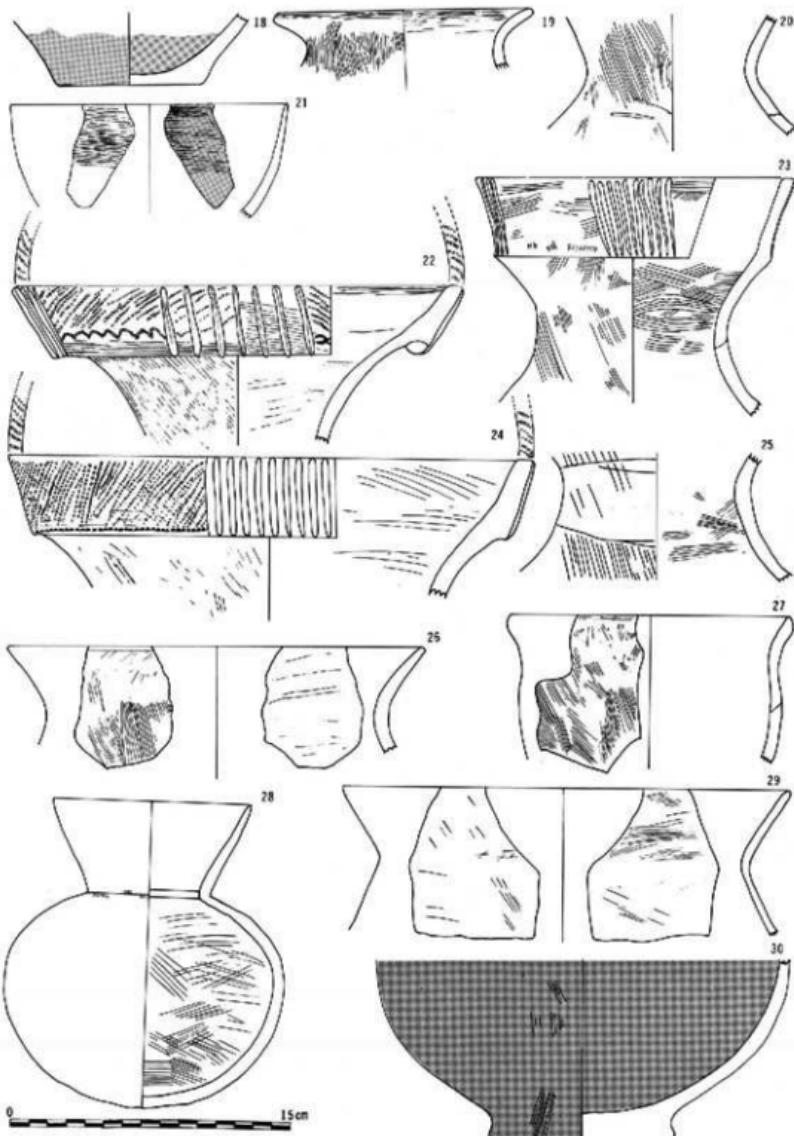


第37図 第1層出土遺物

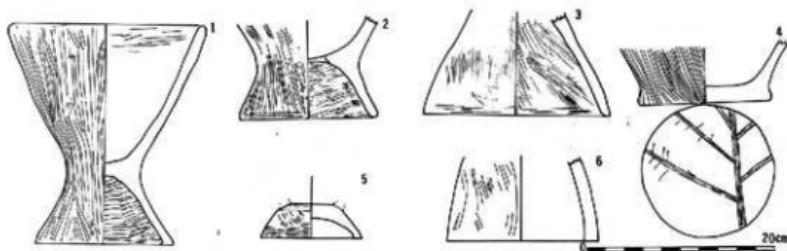


第38図 各グリッド出土遺物

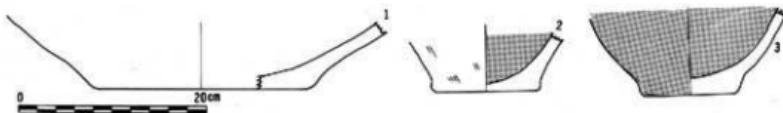
- | | | | | | |
|---------|---------|---------|----------|----------|----------|
| 1. D-3 | 4. D-11 | 7. B-4 | 10. B-10 | 13. A-13 | 16. D-11 |
| 2. D-9 | 5. C-11 | 8. D-3 | 11. B-9 | 14. D-11 | 17. D-11 |
| 3. D-11 | 6. C-11 | 9. D-11 | 12. D-9 | 15. D-11 | |



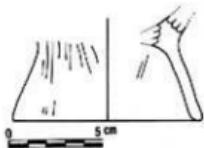
第39図 各グリッド出土遺物
 18. C-4 21. B-8 24. D-11 27. B-4 30. D-20
 19. D-11 22. D-11 25. D-12 28. S D-1 ふく土
 20. C-4 23. D-16 26. D-11 29. D-20



第40図 南斜面No. 1 トレンチ出土遺物



第41図 南斜面No. 2 トレンチ出土遺物



第42図 南斜面No. 3 トレンチ出土遺物

第4章 結び

一城林集落遺跡が営まれた時期は弥生時代後期末葉で、その出土土器の形式は関東地方で編年される前野町式土器に並行するものと考えられる。学習院大学木越邦彦教授に依頼した炭素による年代測定の結果は、西暦330年（±120年）となり、これは本県で、一般的に、弥生時代から古墳時代に移行する時期と考えられている年代とほぼ一致するものである。

主な遺構は6軒の住居址と2本の溝で、これらは、出土遺物の編年と第2層を切り込んでいる点で一致するので、ほぼ同一時期と考えられる。したがって、弥生時代後期末葉の単純遺跡で、短い期間に営まれた遺構群であると言える。集落址はこの発掘地点より下方に広がっていて、その形態は明確に把握出来なかったが、住居址群は台地の中央東寄りに集中し、南と西側にも散在しているようである。土器の器形・文様とも静岡県方面の影響がみられ、静岡県遺跡と同時期である。特にY1住居址床面直上から出土した土器は、壺があればセットとなるものである。

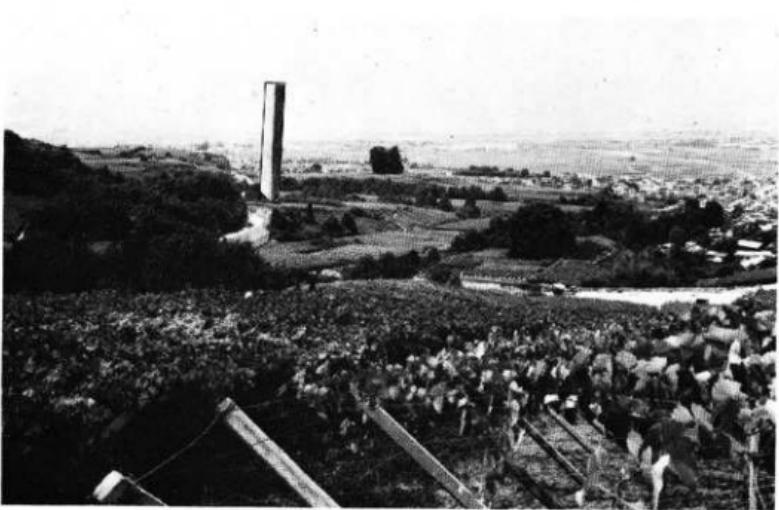
本県では、中道町に建設される風土記の丘予定地内の岩清水遺跡で、方型台状遺構に伴って、同時期か、それよりやや下る遺物が、ほぼセットで出土している。ここからは完形の壺が伴出しているので、一城林遺跡のY1住居址出土遺物を補足するものである。

この一城林遺跡と岩清水遺跡との出土遺物を一括品と見るならば、静岡県沼津市にある二本松遺跡の出土品とその時期がほぼ一致すると見ることが出来る。一部弥生町式と口縁部の刻目やはけ目等が似ているが、出土した土器の種類の全体像、器形・文様・はけ目等は二本松遺跡に類似品が多いといえる。

この直後に出現する五領式土器は本県の場合、京原遺跡から一括出土した五領II型式に比定されたセットがあるが、五領I型式については未だ不明確の部分が多い。

一城林遺跡ではS字状口縁は出土していないので、京原遺跡との間を棊ぐものがほしいところである。

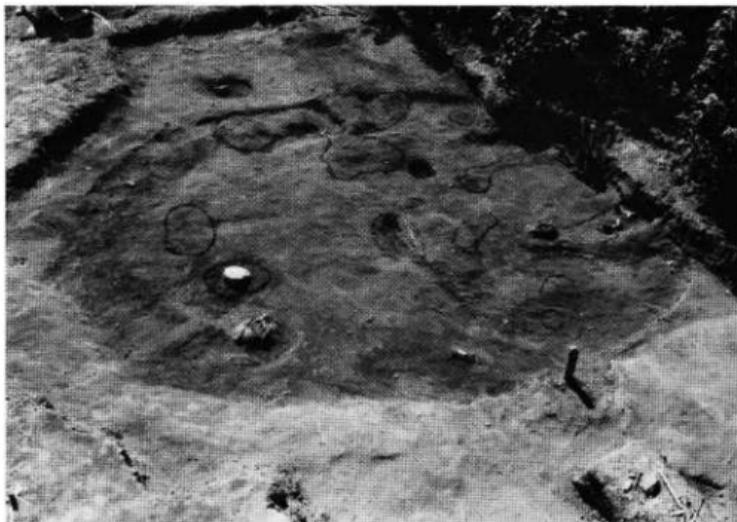
一城林遺跡は本県古墳出現期の直前にあたり、本県初現期古墳が集中する中道町岩清水遺跡付近との関係が興味あるところである。（森和敏）



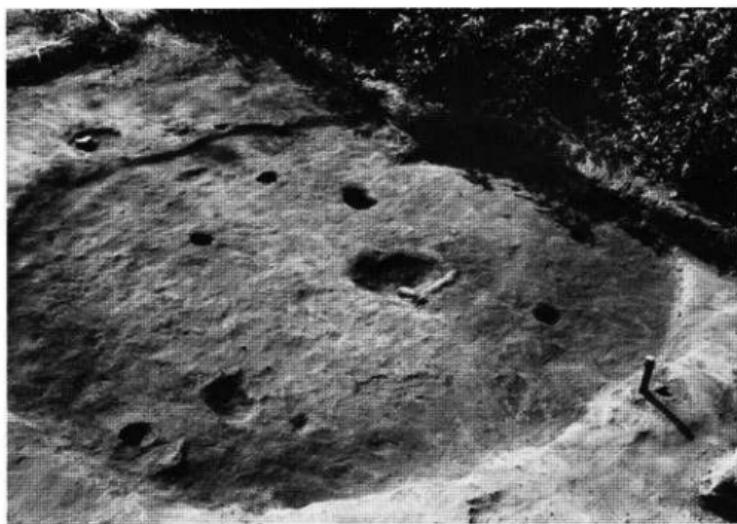
遺跡遠影



図版1 遺跡近影



Y 1 住居址遺物出土狀況



圖版2 Y 1 住居址



Y 1 住居址 炉址



圖版3 第 2 号 溝 (SD-2)



Y 1 住居址土器出土状况



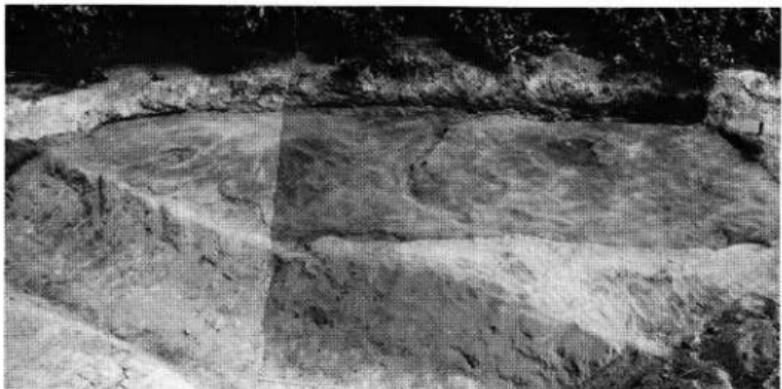
圖版4 Y 1 住居址土器出土状况



Y 2 住居址



図版5 Y 2 住居址炉址用の石出土状況



第1号溝（SD-1）、Y4 住居址、Y5 住居址



図版6 SD-1 増出土状況



Y4 住居址サブトレンチ土器出土状況



Y 6 住居址遺物出土狀況



図版 7 集 石 址



Y 3 住居址埋甕出土状況



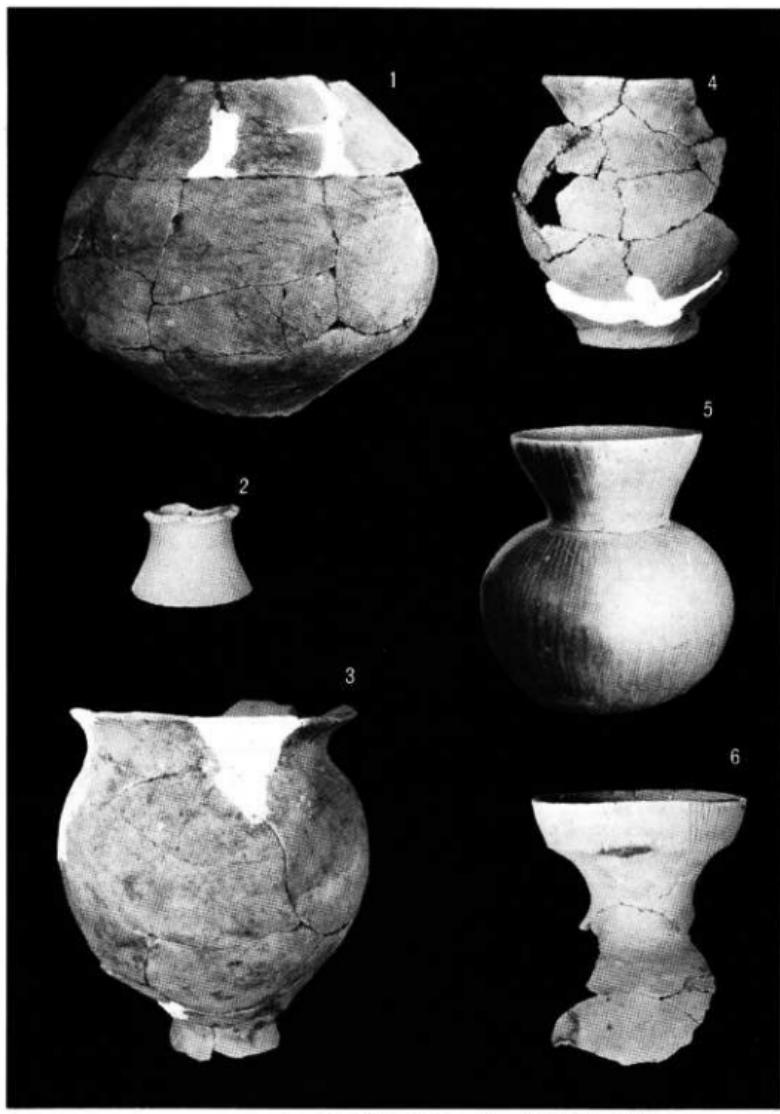
図版 8 発掘参加者 前列向って右から 今村、土橋、小林、丹沢
後列 " 森、渡辺、横小路、清水



図版9 出土遺物
1. 2 Y1 住居址床直上出土、5. D-16グリッド出土
3. Y5 住居址出土
4. D-11グリッド出土



図版10 出土遺物
1.3 一城林遺跡表面採集、5. D-11グリッド出土
4. Na.1 トレンチ出土
2. Y 1 住居址床面出土



図版11 出土遺物

1. D-11グリッド出土
2. Y3住居址埋窯
3. D-11グリッド出土
4. B-10グリッド出土
5. Y4住居址出土
6.

昭和55年度

一東八代横断広域農道建設に伴う一

一 城 林 遺 跡

弥生時代末期集落の発掘調査報告書

印刷 昭和55年10月25日

発行 昭和55年10月31日

発行所 山梨県教育委員会

印刷所 ヨネヤ印刷合資会社

